

地 域 交 流 研 究

年報第 21 号

都 留 文 科 大 学 地 域 交 流 研 究 セ ン タ ー

2024年度

地域交流研究

2024 年度

年報 第 21 号

目 次

2024 年度（令和 6 年度）活動報告

I. 2024（令和6）年度の活動について〔総括〕	1
II. 各部門の活動	4
II－1. 自然共生研究部門	
II－1－1. 動物の生態研究と教育・展示活動	
II－1－2. キャンパス内の絶滅危惧植物の保全活動	
II－1－3. 水文環境研究と自然に関わる市民公開講座	
II－1－4. 谷ニラボ	
II－2. 共生教育研究部門	
II－2－1. 地域情報教育	
II－2－2. 地域美術教育	
II－2－3. 地域インクルーシブ教育	
II－2－3. 社会教育	
II－3. まちづくり研究部門	
II－4. グローカル交流研究部門	
III. インターフェイスとメディアの活動	43
III－1. 各種講座の開催	
III－1－1. 都留文科大学現職教員教育講座	
III－1－2. 都留文科大学子ども公開講座	
III－2. 学部共通科目の開講	
III－2－1. 「フィールド・ミュージアム入門」	
III－2－2. 「フィールド・ミュージアム研究Ⅰ」 / 「地域交流研究Ⅰ」	
III－2－3. 「フィールド・ミュージアム研究Ⅱ」 / 「地域交流研究Ⅱ」	
III－2－4. 「フィールド・ミュージアム研究Ⅲ」 / 「地域交流研究Ⅲ」	
III－2－5. 「地域交流研究Ⅳ」	
IV. 地域貢献活動	52
IV－1. 山梨県南都留地域教育フォーラム	
IV－2. 都留市放課後子ども教室事業	
IV－3. 文大ボランティアひろば	
IV－4. 学級づくりの向上をめざす実践講座	
IV－5. 市民公開講座	
V. 地域交流研究教育プロジェクト	64
V－1. 食育つる推進プラン	
V－2. こどもフィールド・ノート	
V－3. 「フィールド・キャンパス構想」推進プロジェクト	
VI. 協力研究員活動報告	69
VI－1. 地域交流研究センター協力研究員 伊藤 瑠依	
VI－2. 地域交流研究センター協力研究員 菊池 香帆	

活 動 報 告

2024 年度

活動報告

2024 年度（令和 6 年度）

I. 2024（令和 6）年度の活動について【総括】

地域交流研究センター(以下、センターと記す)は、2024（令和 6）年度で発足から 22 年目を迎えた。センター発足以前から、都留文科大学では地域との交流や、学生・教職員・市民との協働によるさまざまな実践が行われてきた。さらに先人による地域における諸実践の積み重ねにより、活動に不可欠な人間関係や、じかに自然や文化に触れ学びを深めるフィールドが築かれてきた。教職支援センターに移管された SAT 事業や現在のセンターの多様な諸活動もこのような地道な取組が基盤となっている。

こうした地域での継続的な取組や理念を大学として大切に受け継ぎ発展させていくために、センター発足時に確認した基本的な考え方は次の 3 点である。

- ①大学に対する地域の要請に、本学のもつ諸資源を活かして対応し、「地域の大学」としてその役割を担っていくこと
- ②地域性や実践性の問われる本学の研究・教育の一環として、地域（現場）に赴き、「課題」と取り組む地域の人びとと共同して活動を展開すること
- ③これらの活動の蓄積を通して、本学も地域づくりに参加し、その一端を担うこと

こうした基本的な考え方は、現在でもセンターの各部門の活動や市民公開講座、地域貢献活動等に反映されている。またセンターが地域のあらゆる要請に対応する単なる「地域交流センター」ではなく、地域との交流のあり方を本学の研究や教育の側面から捉え直し、兼任教員の持ち味を活かした取組を通して地域での交流のあり方を研究する「地域交流研究センター」であることも確認してきた。

本学の研究・教育の特色を活かした地域貢献活動を充実させるために、センターでは、現在、「自然共生研究部門」「共生教育研究部門」「まちづくり研究部門」「グローバル交流研究部門」を設置し活動している。当センター発足時に、地域を捉える視点として「自然」「教育」「仕事と暮らし」をテーマとしたが、その基本的な視点は現在のセンター各部門の活動にも受け継がれている。

「自然共生研究部門」では、ムササビ観察会や湧水さんぽ、星空講演会、谷村第二小学校放課後実験教室（「谷ニラボ」）のほか、毎月 2 回「キャンパス生き物 Map」としてキャンパス内の動植物の調査を実施した。「フィールド・ノート」は第 117 号及び 118 号を発行、センター協力研究員である宝小学校教諭北浦貴之氏指導による同小学校「こどもフィールド・ノート」第 2 号を発行した。また、「つる地域教材研究会」の分科会である「フィールド・ミュージアム研究会」の一環「FIELD MUSEUM STUDIES」として、上野原市秋山地区における地域を舞台にした学習の様子を取材した。

「共生教育研究部門」では、宝保育所と連携した造形表現活動や障がいなど地域のニー

ズのある人たちの週末の居場所づくりの活動「クロスボーダープロジェクト」や「キャリアデザインワーク」、「バンカム、ツル」の2階を借り俳人である神野紗季氏を迎えてのワークショップ「つるぶんカフェ」の事業等を実施した。

「まちづくり研究部門」では、富士急行線谷村町駅において放課後の子どもたちの居場所づくり「ぷらっとはうす」を毎週水・金曜日開催、夏休み宿題教室や流しそうめん大会、「つる子どもまつり」への出展も行った。富士急行・都留市と連携した観光まちづくりプロジェクトでは、都留市内に3つのサイクリングコースを企画し、マップで表現した。また、富士山における御師文化に関する調査研究、セミナーを開催した。

「グローバル交流研究部門」では、留学生と地域の方々、本学学生との交流をテーマとした「ムササビ観察会」を開催した。

研究部門以外の事業として、「VR 体験・レーザーカッターでデジタル工作」「手作り石鹸やキャンドルを作ろう」「食育つるクッキング教室」等の「子ども公開講座」を計8回開催した。大学と地域との学びを通じた交流の場となっている。特にロンドンオリンピックに出場した本学出身の佐野夢加氏による「佐野夢加かけっこ教室」は毎年好評を博し、6月30日（日）に実施した。

センターでは、地域におけるボランティアニーズの紹介や地域と学生間のマッチング事業を継続して行っている。ボランティアニーズに対してはセンター会議で内容等について確認した後、所定の書式で学生に周知をすることとした。なお、2024（令和6）年度の学生ボランティア登録は、100名であった。また、ボランティアを通して交流できる場、「文大ボランティアひろば」を月1回、昼休みに開催した。THMC（6号館）3階のコモンズを会場に、ボランティア活動団体に活動紹介をしてもらい、学生との交流をはかった。ゴミ拾いや募金の実践も加わり、活動の様子をより具体的に学生に伝えられたのではないだろうか。

センターの広報については、冊子、パンフレット、SNS、ホームページといった媒体を使い、幅広い年齢層を対象にして行った。特に本学入学を希望する高校生には、センター活動や本学の魅力を伝えるために見開き4頁の「FIELD MUSEUM NEWS」を3号発刊し、オープンキャンパスや出前授業、高校訪問等で配布した。オープンキャンパスでは、センターは「フィールド・ノート」を編集する学生がキャンパスツアーを担当し、高校生に本学の魅力を直接PRした。また、オープンキャンパスではスタンプラリーを行い、達成した高校生・家族には、手作りのムササビの缶バッジを提供、合格祈念になると好評であった。また、都留文科大学前駅展示室については、学生スタッフを募り、展示を充実させた。2025（令和7）年2月発行『大人のための首都圏散策マガジン 散歩の達人』に都留文科大学前駅におけるこの展示活動が掲載された。

2024（令和6）年度の「地域交流研究センターフォーラム」は、12月18日（水）に医療的ケアを要する帆花さんとそのご家族の日々を描いた映画「帆花」の上映を行った。

2024（令和6）年度は、コロナ禍から解放されて1年が経過し、事業を実施する上での制限はほぼなくなった状態で実施できたといえるだろう。

2024（令和6）年度のセンターのトピックとして、次の2点を取り上げたい。

1点目は、都留市複合型居住プロジェクトにおける大学連携施設「つるフィールド・ミュージアム」が着工を迎えたことだ。施設は内藤廣建築設計事務所による設計で、「楽しむ」「学ぶ」「つながる」といった施設計画のポリシーに基づき、「まちの縁側」として建物四

周を半外部化した計画となっている。1 階は本学元学長・名誉教授でもある教育学者大田堯氏のコレクションを収蔵する資料室や地域交流研究センター、2 階は家庭科に関連した調理室や実験室、被服室となっている。また、大田堯施設計画に際してはこれまで多くの会議が重ねられ、大学職員、都留市、内藤廣建築設計事務所、関係の皆様には感謝を申し上げたい。2025（令和 7）年 3 月末に竣工を迎える予定である。

2 点目は、「共生教育研究部門」における「地域インクルーシブ教育分野」が「令和 6 年度『障害者の生涯学習支援活動』に係る文部科学大臣表彰」を受賞したことである。「地域インクルーシブ教育分野」では、地域の特別なニーズのある人たち（及びご家族）への教育・心理的支援とインクルーシブな地域づくりを推進することを目的とし、①特別なニーズのある人たちの週末の居場所づくり「クロスボーダープロジェクト」、②特別なニーズのある若者たちのキャリア形成支援「キャリアデザインワーク」を堤英俊教員が中心となって取り組んでこられ、これまでの実績と成果が認められた。2024（令和 6）年 12 月 10 日（火）に文部科学省東館 3 階講堂にて表彰式が開催された。

センターの運営に関し、今後の課題として以下の 3 点を挙げたい。

1 点目は、2025（令和 7）年 3 月末竣工予定の上記「つるフィールド・ミュージアム」の管理計画についてである。安全安心に施設運営ができ、さらに新施設が多世代・多文化交流拠点として機能するための施設管理運営体制を導入することが必須である。

2 点目は、THMC（6 号館）3 階及び 4 階に設置されたラーニング・コモンズの設備の充実化である。センターでは、ボランティア広場やまちづくり研究部門等で積極的に利用しているが、机や椅子、ホワイトボードの数が不足している状況が続いている。また、本学学生のみならず近隣高校生の利用も多い。早急に改善を求めたい。

3 点目は、センター事業に参加しやすくするための環境整備である。センターでは各教員の持ち味を活かした魅力ある事業が展開され、大学認証評価等で高い評価を受けている。本学の地域貢献活動は、兼担教員のボランティアな精神と熱意とによって支えられている。

「地域の大学」を掲げる本学の地域交流の現実に応じて、兼担教員や学生、職員、市民が参加できる、あるいは参加しやすい環境の整備が引き続き重要である。

2024（令和 6）年度から、副専攻プログラムとして「フィールド・ミュージアム入門」「フィールド・ミュージアム研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「フィールド・ミュージアム演習Ⅰ・Ⅱ」が開始する。この副専攻では、センターが築き蓄積してきた地域での人間関係やフィールドを基礎として、知識だけでなく卒業後の人生に活かせる「生きた学び」の修得を目指している。また、地域交流研究教育プロジェクトも開始予定である。

最後に、本年度は、20 名を超える教員にセンター委員として関わっていただいた。センター事業の実施に際しては、多くの学生、教職員、市民の協力を受けた。センター活動を支えていただいた全ての方々に、深くお礼を申し上げたい。

（文責：鈴木健大）

Ⅱ．各部門の活動

Ⅱ－１．自然共生研究部門

【2024 年度（令和 6 年度）の活動概要】

2003 年の地域交流研究センター（以下「センター」と記す）が発足すると同時に一部門として位置づけられたフィールド・ミュージアム部門は、センターの再編にともない、2019 年度、「自然共生研究部門」と改称した。自然共生研究部門としての活動は 6 年目となる。センターは発足以前から、地域を博物館に見立て地域での事象や活動にじかに触れることで、機械的な暗記とは異なる「生きた学び」、つまり知識や技能を生活の中で活かすことができる学びを体験するという大田堯元学長による「都留自然博物館」や今泉吉晴本学名誉教授による「都留フィールド・ミュージアム」が構想されてきた。こうしたセンター発足以前の構想や諸実践、2003 年以降の取組を受け継ぎながら「自然共生研究部門」では活動をしてきた。

自然共生研究部門では、教員の専門領域を超えた協働というセンターの特徴を活かし、「地域の自然と暮らし」をテーマに次のような活動に取り組んでいる。

- ・ 調査と研究
 - ①動物の生態研究
 - ②水文（すいもん） 環境（水循環など）の研究
 - ③地域の農林業の持続に関する研究
 - ④自然と文化の保全活動
- ・ 収集と保管
 - ①地域の自然・文化資料の収集と保管
- ・ 教育と公開
 - ①自然観察会（ムササビ観察会、湧水観察など）
 - ②キャンパスの緑化活動
 - ③出前講座・公開講座・放課後実験教室
 - ④展示
 - ⑤出版（機関誌『フィールド・ノート』の発行など）

本年報では、2024 年度に取り組んだ事業について担当者ごとに報告する。

Ⅱ－１－１．動物の生態研究と教育・展示活動

1. 2024 年度の活動概要

「フィールド・ミュージアム部門」の活動を受け継ぎ、地域の動物の生態研究を基盤に、①自然との共生のあり方を市民との交流事業を通して探ること②学生と市民との交流により地域の自然や文化を記録し保存し発信すること、を活動のおもな目的としている。2023 年度に新型コロナウイルス感染症が 5 類という位置づけになったが、活動内容や室内の使用などはこれまで通り感染対策を講じながら慎重に活動を実施した。以下にその活動内容を報告する。

2. 活動の状況

(1) 機関誌『フィールド・ノート』の編集と発行

学生が主体となり編集・発行する冊子『フィールド・ノート』を年2号発行した。この冊子編集は、地域交流研究センターの機関誌に位置づけられている活動で、2002年に創刊し2018年に第100号発行を迎えた。

参加する学生は、自ら記事の企画をたて、実際に地域に出て観察や取材をし、記事を書き、レイアウト、入稿など一連の編集作業を行なう。地域はもとより全国からの購読の要望があり、本学の教職員、学生、市民、全国の希望する読者に届けている。

2024年度の発行状況は次の通りである。

117号：2024年7月発行、3,500部（オープンキャンパス用に2,500部増刷）

118号：2024年12月発行、1,000部

(2) ムササビ観察バスツアー

ムササビは身近な哺乳類でもあり、ほぼ定刻（日没後30分ほど）に活動を開始することなどから観察会の入門としても適している。赤いセロファンを付けることでムササビに眩しさを感じさせないようにしてできる限り自然な暮らしの様子を観察しようと工夫したのが本学の今泉吉晴名誉教授である。対象となる動物に干渉せず、お互いの暮らしを尊重しながら観察するというそのスタイルを受け継ぎ、ムササビの観察をとおして地域の自然の魅力や共生のあり方を探ろうというのがこの観察会の目的である。都留市の今宮神社をフィールドとし、氏子総代とも連絡をとり日程を決め、開催した。例年、現地までの交通の安全性を考慮しバスで移動するスタイルで実施している。

この観察会では、本学の環境ESDプログラムを受講する学生の実習を受け入れている。2024年度の実習生の受け入れは4名で、事前準備とムササビ観察会の開催など45時間の実習を実施した。

開催日は次の通りである。

①2024年7月20日

②2024年7月27日

③2024年11月9日

④2024年11月16日

⑤2024年12月14日

なお、2024年11月16日は、国際教育学科の学生が通訳として参加し、留学生と市民を対象とした観察会を開催した。

参加者からは次のような感想が寄せられた（抜粋）

■ 普段の日常をすごしていたら出会えない感動に会えました。貴重な体験ができました。

■ ずっとムササビに会いたいと思っていたので、今日は見る事が出来て本当に良かったです。

■ とても楽しかったです。先生の説明もあり、とても勉強になりました。また秋も楽しみにしています。

■ 学生さんたちのガイド、上手でした。

- 身近で観察・体験できることに感謝します。地道な活動ですが、価値あるものですね。
- 雨の中、気が進まず孫の付き合いで来ましたが、帰りは楽しい気分でルンルンです。
- 先生と学生さんのご苦勞に頭が下がる思いがします。雨が残念でした。食痕やフンのことなど勉強になりました。子供の為に参加したのですが、大人も楽しめました。

(3) 都留文科大学附属小学校など地域の小学校への授業参加

学校林や学校に隣接する森をフィールドとし、地域の自然を観察し親しむことを目的とする理科授業を行った。

小学校における授業は次の通りである。

- ①都留文科大学附属小学校:3年生、4年生を対象とした理科授業(2024年10月1日、10月22日、11月11日【3年生対象学校林探索】12月3日)
- ②上野原市立島田小学校 :3・4年生を対象とした理科授業(2024年10月28日)

(4) 富士急行駅舎を活用した展示活動

2024年度も、富士急行線都留文科大学前駅の駅舎を博物館の分館と位置づけ、展示活動を行った。地域交流研究センターおよび自然共生研究部門の活動を広報し、交流の輪を広げることが目的である。駅舎では、キャンパス周辺の自然をテーマとし展示を行なった。

本学の華道サークルも生け花を定期的に展示しており、駅舎の利用者にも好評であった。

3. 2025年度の活動予定

「自然共生研究部門」では、今後もそれぞれの教員の持ち味を活かしながら事業を展開し、領域を超えた協働による事業にも取り組みたい。

2025年度、北垣が担当する取り組みとしては次のような事業を計画している。

1. 新棟(「つるフィールド・ミュージアム」)での学生参加によるミュージアム活動
2. 環境ESDプログラムと連携した「ムササビ観察バスツアー」の開催
3. 地域の小学校の授業への参加
4. 富士急行線駅舎を活用した展示活動
5. ビオトープ作業
6. ムササビの森整備事業

上記の1~4の事業を通して、地域の自然や文化を保存するだけでなく、立場を異にするさまざまな人びとが集い、相互の交流・啓発を深めるなかで地域の文化や自然を創造的に継承していけるような仕組みを整えていきたい。センターが推進する「つるフィールド・ミュージアム」の諸実践や理念を体現するような施設になるようセンターの活動を展開していきたい。

(文責：北垣憲仁)

Ⅱ－１－２．キャンパス内の絶滅危惧植物の保全活動

1. 令和6年度の活動の概要

本学キャンパス内にはキンラン、ギンラン、カワラナデシコ、シュンラン、カタクリ、ウメガサソウ等、絶滅危惧植物が多数生育している。これらの植物を保全し、学生や教職員（将来的には地域住民も含める）が絶滅危惧植物の生態や、植物と環境との関係について学び・親しめる植物園や緑地を整備することを本活動の目的としている。またこれらの活動に加えて、自然や植物を生かした生活の知恵を学んだり、料理・工作等の体験をおこなう。本活動は、様々な世代や学年・多様なバックグラウンドを有する人々が、共に活動・交流し、自然や植物に親しみ、楽しみながら学ぶことを通して、横断的・複合的な学びの在り方や、理論と実践の往還による学びの在り方について実験的に探究することを目指している。令和6年度は、学校教育学科、地域社会学科、国文学科、比較文化学科の学生たち約8名と、教職員約3名により、自然科学棟の緑地、コミュニケーションホール北側の緑地、6号館の緑地の保全と手入れ、天然酵母のパン作りやリースの作成等をおこなった。

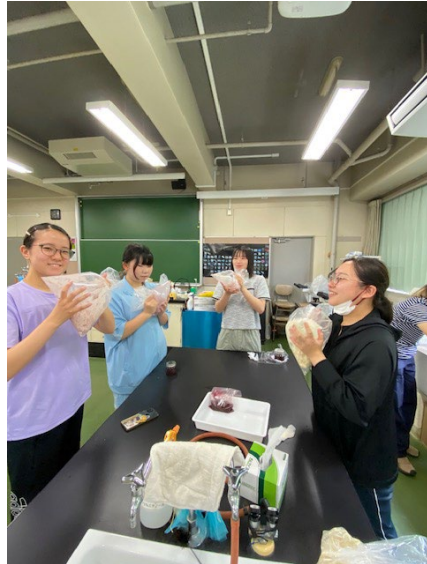
2. 活動の状況

自然科学棟の中庭のケヤキ大木が伐採され、3年が経過した。令和4年度に中庭に移植・播種した絶滅危惧植物（カワラナデシコ、カタクリ、エビネ、チゴユリ）は、無事に定着しているが、ケヤキの大木の伐採により光環境が大きく変化し、すぐに“雑草”たちに被陰されてしまうため、定期的な除草が必要な状況である。保全の必要な植物が植栽してあるため、草刈機を使つての除草は難しい。そのため、除草対象の植物と保全対象の植物を見極めながら、人の手によって除草をしているが、除草が間に合わず、年々雑草が繁茂してきてしまっている状況である。6号館と駐車場の間にあるコケモモの植栽、コミュニケーションホールの北側のキンラン・ギンランの生息地も機械を使つての除草ができないため、人の手によって丁寧に除草をしている。除草の際には、毎回、その季節の植物の観察をおこなったり、なぜその植物を除草するのかを説明してから除草をおこなっている。定期的な除草の合間に、野生の果実（ヤマグワ）を利用した天然酵母の培養とパン作り、自然の素材（マツボックリや針葉樹等）を利用したクリスマスリースの作成をおこなった。また、コミュニケーションホール北側の緑地には、絶滅危惧植物のキンランとギンラン、ウメガサソウが生育するが、ウメガサソウが令和5年度の夏に盗掘されてしまったため、学生たちと定期的に残された株の確認をおこなった。いずれの活動も、それぞれがただの作業で終わるのではなく、生物学・植物学・生態学的な背景的知識等を織り交ぜながら、学びに結びつくような実施内容を心掛けた。学生たちは、この活動の中で、教職員や学科の垣根を越えて交流を深め、地域の食文化や自然についても体験的に学ぶことができる良い機会となっていた。

表 1. 令和6年度の活動内容と参加人数

日 程	活動内容 (基本的に水曜日の8～9時、1・2限のいずれかに実施)	参加者の 人数
4月25日	6号館前のコケモモ植栽の手入れ	4人
5月8日	キャンパス内の絶滅危惧植物の調査	6人
6月19日	天然酵母の培養	6人
6月26日	天然酵母のパン作り	7人
7月17日	6号館前のコケモモ植栽の手入れ	4人
7月24日	自然科学棟前庭の除草	2人
11月6日	自然科学棟中庭の除草	4人
11月27日	学内の植物を使ったクリスマスリースの作成①	7人
12月18日	学内の植物を使ったクリスマスリースの作成②	4人

図 1. 各活動での参加者の様子



3. 課 題

参加学生と協力研究員の菊池香帆さん、自然科学棟清掃員の吉田さんの協力のもと、保全活動が続けているが、課題も山積している。まず参加者が毎回4～7人であることと、除草できる時間が60分程度であること、教員の多忙さから、除草頻度と除草面積（規模）がどうしても少なくなってしまうことにより、理想的な管理ができていない状況である。参加者を増やし、管理を丁寧にしていくためには、教員の熱意と学生・職員の善意に頼った組織・運営を改善していく必要がある。暇な時間など全くない教職員と、授業で時間割が埋まった学生たちが、無理なくキャンパス内の緑地の保全活動を継続できる持続可能な仕組みを考える時が来ているが、難しいのが現状である。

4. 令和7年度の活動予定

令和6年度までのこの活動には、様々な学科の多様な学生たちが参加し、学科を越えた横のつながりと、世代を超えた縦のつながりが形成されてきた。参加メンバーの様々なバックグラウンドが掛け合わされ、新しい知識や世界との出会いが生まれるという、とても意義のある活動が展開できていたと感じる。しかしながら、令和7年度は、担当教員の多忙のため、活動ペースを落とさざるを得ない。この活動の教育的意義は大変大きいと感じるが、現在の体制では持続可能な活動や手入れは難しいだろう。令和7年度は、多くの人に関わることができる持続可能な運営体制をいかに築くかを考えていきたい。

（文責：別宮有紀子）

Ⅱ－１－３．水文環境研究と自然に関わる市民公開講座

1. 令和 6 年度の活動概要

本事業は都留市の人々や動植物の暮らしに関わりの深い水文環境について、地層と地下水流動の関連性に関する研究や、湧水や水循環に関して都留市民との情報交流することを目的として 2015 年度より継続して実施している。研究対象エリアは東桂地区を主眼に置き、湧水量や地下水位変動などのデータの収集、およびその解析を行っている。また、市民公開講座では、都留市の自然に対して市民の関心を高め、知的欲求を満たすことを目的として開催している。令和 6 年度は 3 本の講座を実施した。以下にその詳細を述べる。

2. 活動の状況

(1) 都留市十日市場・夏狩地域の湧水調査研究

都留市は富士山頂から直線距離で約 25km であるが、調査地域には古富士火山が山体崩壊して桂川の河谷に流れ込んで形成された古富士泥流堆積物の上に、新富士火山初期の活動期に噴出した猿橋溶岩と桂溶岩の 2 層が分布している。都留市が利用する富士山からの湧水は、後者の桂溶岩中を流動した地下水がその末端崖より湧出している。この湧水に関して、十日市場の永寿院の敷地を借用して、2015 年度から継続して湧水量と水温の観測を実施している。湧水量の観測は、湧水が集まった小水路に自記水位計 S&DLmini (OYO 株式会社製) を設置して 1 回/時間の連続水位を観測し、流量観測結果を解析して得られた H-Q カーブ (水位と流量との関係式) を用いて水位を流量に換算して湧水量とした。2024 年 1 月から 12 月までの観測結果は以下のとおりである。

本年度は自記水位計が破損したため、水位測定が 9 月 10 日までしかできていない。しかしその値を解析すると、湧水量は約 40～1720m³/day の間で変動したことになる。しかし 2015 年から測定を続けていて最小値も最大値も共に、このような値は観測したことが無い。また本年度の定期測定時にも例年と大幅に流量が変動している様子は観測できていない。データを詳細に解析すると、2024 年 1 月 1 日 0:00～7 月 22 日 20:00 までは湧水量は約 575～780m³/day の間で安定して推移しているが、7 月 22 日 21:00 以降で大きく変動している。値としては、7 月 22 日 20:00 は湧水量 637.8 m³/day, 7 月 22 日 21:00 は湧水量 1364.3 m³/day と 1 時間で湧水量が倍以上に跳ね上がっている。この日の大月気象観測所の記録では、日の出から 13 時まで晴、それ以降曇りとなり、21 時台に 1.5mm/h の雨が降っているが、この降水量ではこのような湧水量の変化にはつながらない。また、それより前は、7 月 16 日に 23.5mm/day, 7 月 17 日に 5.5mm/day の雨を観測した後、22 日まで雨は降っていない。また、7 月 22 日 21:00 以降、おおよそ 50～80 時間の周期で大きく増減を繰り返し、その増減はそのときの降水パターンとは関連性が認められない。従って、7 月 22 日 20:00 から 21:00 の間に自記水位計が破損したと判断し、21:00 以降の記録は採用しないものとする。

1 月 1 日 0:00～7 月 22 日 20:00 までの湧水量は約 575～780m³/day の間で変化した。湧水量はほぼ安定しており、6 月 18 日に 84mm を記録した梅雨末期の大雨のときに 700mm を超える湧水量を記録したが、それ以外は湧水量に大きな変動は認められない。水温は 12.7～13.4℃の間で変動した。

(2) 都留市内の地下水位モニタリング

都留市では市民の水道水源でもある地下水を保全する目的で、2018年10月に地下水保全条例を制定した。地下水位の経年変化を把握し、地下水賦存量解析などの基礎資料を得るために、桂町（異なる深度2本）、十日市場、法能、禾生、鹿留、大幡、朝日馬場の市内7地点に8本の地下水位観測井を設け、2019年4月よりモニタリングをしており、本学ではその結果の監修をしている。また、それとは別に2本の地下水位観測孔が十日市場に2本あり、共同研究として地下水位観測を実施している。2024年の結果は都留市地域環境課によりホームページ（https://www.city.tsuru.yamanashi.jp/material/files/-group/7/tikasui_r6.pdf）で公表されているので参照されたい。

(3) 市民公開講座

令和5年度は、湧水さんぽ（1回）と星空観察会（2回）の合計3講座を開催した。昨年度は湧水さんぽを7月に実施したが、暑い時期の開催は参加者への負担が大きいことから、本年度は開催時期を10月に変更した。以下に各講座の詳細を述べる。

<1. 湧水さんぽ>

- ・日時：2024年11月16日（土） 9:10～12:30
- ・講師：内山美恵子（都留文科大学教養学部学校教育学科 教授）
- ・場所：都留市夏狩～十日市場
- ・参加者数：6名（一般市民3名、本学学生3名）、スタッフ2名

本学周辺は環境省の平成名水百選「十日市場・夏狩湧水群」に選定され、富士山を涵養源の一つとした地下水が大量に湧き出す湧水が数多く見られるが、地元住民の中にはご存じない方もいる。自分の住む地域の自然に関心を持っていただくことを目的として、例年、大学教員の解説を聞きながら湧水を見て歩く「湧水さんぽ」を実施している。本年度は学生3名、地元の方3名で和気あいあいとした雰囲気で行った。参加者の中には本講座への参加が2回目の方もいらっしゃった。リピーターの存在に説明のバリエーションを加える必要性を感じたが、水環境に興味を持っていただき、この行事の成果が現れつつあると考える。今後も継続して実施していきたい。

以下は、参加者の感想である。

【感想】（原文のまま）

★今回は1人で参加して充分楽しめたので、次回は友達を誘ってまた参加できたら良いなと思いました。ありがとうございました。 ★自分の住む地域や生活には欠かせない水について知るきっかけとなりました。普段の生活では気付かず過ごしていたまちの風景が今回の講座を経てより鮮明になりました。ありがとうございました。 ★改めて都留の水について学ぶ、考える機会になりました。気温も低すぎず歩きやすかったです。地型を溶岩から捉えるのは初めてだったのでたくさんを知ることができました。1人だと寂しさやただみだけで終わってしまうので、先生の解説があるとくわしく知ることができました。 ★地元で長く住んでいるので文化財として貴重な資産をきちんと解説していただけて地元再発見として有益な機会となりました。感謝申し上げます。 ★都留市に30年程住んでおりま

すが、こんなにお水が豊富な町だったとは驚きました。富士山の恩恵をこんなにも頂いていたとは改めて感謝です。水が地層によって冬でも14℃位を保っていたり、それによって水菜や魚の生息にも関係していたりととても奥が深いと思いました。体の70%は水でできているのでおいしく安心安心なお水をとっていきたいと思います。本日はありがとうございました。

★コース取りが良く、楽しめました。準備、案内ありがとうございました。

<2. 星空観察会>

- ・日時：第1回 2024年11月08日（金）18:20 ～ 20:50
第2回 2024年12月07日（土）18:00 ～ 20:30
- ・講師：古荘玲子（都留文科大学，国立天文台），補助：内山美恵子（都留文科大学学校教育学科）
- ・場所：都留文科大学 自然科学棟天文台・S6教室
- ・参加者数：第1回 14名（本学学生12名，一般市民2名）
第2回 15名（本学学生1名，教職員2名，一般市民12名）

星空観察会は毎年、参加希望者の多い講座である。2回とも参加者をオープンにすると、学外参加者の申し込みが遅れることで参加できないケースが多い、との指摘を受けたため、本年度は第1回目を学内対象、第2回目を学外対象として受け付けた。本学は桂川の谷の中にあるため晴天率が低く、星を観望できないことも多いが、本年度は運良く、2回共に観察ができ、両回とも木星・土星・月を観望した。内容は、天体望遠鏡の仕組みや観察する惑星についての講演会、天文台の見学と星の観察、小口径のニュートン式反射望遠鏡を使用した屋上での星の観察、まとめと今後の天体ショーの案内、アンケートである。参加証として、本学天文台をデザインした缶バッジを配布した。本年度の講座には留学生の参加者もいたが、日本語の資料しか用意できなかったため、国際教育学科の学生さんが同時通訳してくださり、充分楽しめたようだった。

以下は、参加者の感想である。

【感想】（原文のまま）

<第1回>

★地元の天文科学館のプラネタリウムで星の解説を聞いたことが何度かありますが、実際の星を見ながらではまた違うものだと知ることができました。ここまで時間をかけて1つの星をじっくり見たことがなかったので、星の動きの速さに驚きました。望遠鏡を用いての観察など、自分1人ではできないので参加することができてとても良かったです。大学4年目にして初めて入った場所も多く、楽しかったです。分かりやすい説明や安全への配慮望遠鏡の細かい調整等、ありがとうございました。 ★とても楽しかった。今までも夜空を見て星の観察することはあったが、どれが何という名前の星というのが今回知ることができ、より、星への興味が深まった。土星のリング、木星のしましま、月のクレーターを全て確認することができ、ガリレオ衛星というものも見ることができてとても良かった。学校に通っていても、自然科学棟、またドームに入ることはほぼなかったので大学内にこんなのがあるん

だ、と知れて良かった。★よく見えてよかったです。ガリレオ衛星、図鑑で見たことあるけれど実際に見ることで感動でした！！望遠鏡を買いとなりました。★高校の時、敷地内に天文ドームがあったので、天体を見るが多かったが、この大学に来て初めて天体を観察することができた。高校で見たことがあるのは、屈折式なので、反射式では、初めて見たが、どちらも、土星の輪が見れたので、よかった。来年は、輪が見えにくいのは、残念だと思った。★月・土星・木星を2つの望遠鏡を使って観察できて、新たな発見があり、とても面白かったです。2つの望遠鏡で違った見え方があり、ゆっくりと観察できたため、とても勉強になりました。★帰っているときに、星空を見て綺麗だと思うことはありましたが、何座なのか分からずなんとなく見ていたため解説があったおかげでより楽しく見れました。写真でしか見たことがない天体を自分の目で見て貴重な体験ができました。ありがとうございました。★とっても楽しかったです。講座もスライドが分かりやすくとても理解できました。運営もとてもスムーズでございました。望遠鏡で天体を見れるなんてめったにない機会なので今日の思い出を大切にしたいです。貴重な体験をありがとうございました。また機会があれば、公開講座に参加したいです。★土星の環を初めて見れたので、良かった。木星の縞模様 ” ”。大学入学して3年が経ち、初めてS6やドームに入ったため、良い経験になった。★This event was well organised, structured and very insightful. We watched jupiter, saturn and the moon and was given relevant information about what to look for. The professor was helpful and we had plenty of time to watch these beautiful planets through two magnificent telescopes, Arigato gosaimashi ★It was a very nice experience. It was very interesting to see the moon and other planets. I would like to come again ★I really enjoyed the stargazing event. It was very beautiful and interesting, I would love to try it again. Arigato

＜第2回＞

★日ごろから、自然科学棟にある望遠鏡をのぞいてみたいと思っていたため、今回参加させていただきました。土星の環や、木星のしま模様等、肉眼では観察できないものをたくさん見ることができ、楽しかったです。★自然科学棟のドームずっと気になっていたもので、たのしかったです。子どもころ、好きで星をよく見ていたのを思い出しました。流星群、見てみます！ありがとうございました。★遅れて参加しましたが家の都合でTELいただきありがとうございました。土星も月も、金星も初めてみました。人生の後期でみられて良かったです（70才）ありがとうございました。★ふだん何となく、見ている星の姿が、細かく見れてよかったです。土星の輪も、木星ののシマも分かりました。寒さ対策をしっかりしてまた観察したいです。★道からドームが見えたので、望遠鏡があるのかなあと考えていました。学生から一般向けの星空観察会があることを聞いて今回初めて参加しました。特別な機会を与えて下さりありがとうございました。古荘先生のお話はわかりやすく、木星のスジや土星の輪が見れて感激しました。ガリレオ衛星のことは初めて知りました。公開講座に今後も参加したいです。★木星の縞や、土星の輪を望遠鏡で初めて見ることで興味深かったです。ただ星を見るのではなく、目的をもって星を見る方が、楽しいと感じました。★望遠鏡のしくみや、見る時のポイント等を分かりやすく教えて下さり勉強になりました。ありがとうございました★星の観測の基本がわかりやすかったです。★少し雲が多かったの

が残念です。(木星のすじがよく見ることができなかったのが少々残念)(見えた人もいた)
★土星の輪が観測できて良かったです。★いつも下から見ている天文台に上がれて、まずはそれが感激でした。そして、木星の二本の線、月のボコボコ、土星のワッカが自分の目で見られて良かったです。雲の動きがはやかったので、解説よりもレンズで見ることを最優先でもよかったのかなとも思いますが、最低限天文台で見れたので、満足でした。★本格的な望遠鏡でみることができてなかなかない機会でありがたかったです。すごく美しくてびっくりしました。子どもたちに、グループの参加者も学生さんも優しく接して下さいありがとうございました。

3. 令和7年度の活動予定

(1) 都留市を流れる水文環境に関する研究の実施

引き続き、東桂地区の湧水データの収集を実施する。

(2) 市民公開講座

令和7年度は、秋など季節の良い時期に十日市場・夏狩湧水群の野外見学を実施する。また、専門家を講師に迎えての星空講演会ならびに自然科学棟天文台を利用しての星空観察は大変好評であるため、来年度も2回実施する予定である。

(文責：内山美恵子)

Ⅱ－１－４．谷ニラボ

谷村第二小学校での放課後実験教室は平成23年度から実施しているが、令和4年度より自然共生研究部門の事業と位置付けられた。目的は当初より、①小中学校教員をめざす学生が指導的立場で小学生とともに実験をする経験を積むこと、②学生が実験内容の選定から安全な実験教室の運営までを行う経験を積むこと、③学生の自然科学の素養を高めること、④理科実験教室への参加が子どもの理科への興味を高める効果を検討することとしている。幸いなことに、継続して学校から実施を受け入れていただいている。参加者数は35名程度で安定している。

【令和6年度の報告】

第1回（6月3日）は、「のぞいてみるときれいなセカイ」と題して、トイレットペーパーの芯やミラーシート、ビーズなどを材料に、オリジナル万華鏡づくりを行った。33名参加。

第2回（12月23日）では、「マジックツリーをつくろう」と題して、尿素の結晶をモールドで作ったツリーの上に析出させる実験を行った。できたものは雪が積もった木のように見え、季節感のある活動となった。31名参加。

第3回（2月3日）では、「さわってびっくり！温度変化実験」と題し、使い捨てカイロにも使われている発熱反応と、急速冷却パックにも使われている吸熱反応の実験を行った。28名参加。

【令和7年度の活動予定】

令和7年度も年間3回の実施を予定している。

（文責：山森美穂）

Ⅱ－２．共生教育研究部門

Ⅱ－２－１．地域情報教育

１．地域情報教育分野の目的

地域情報教育分野では、地域の方々と情報分野での学びを通して、地域と大学とのつながりを深めることを目指している。主な活動としては、都留市教育委員会主催の子ども公開講座への協力、小学生向けプログラミング講座の実施、地域教員向け情報機器講演会などがある。

２．地域情報教育分野の活動

2024年度は「子ども公開講座 VR体験・レーザーカッターでデジタル工作」、「中学２年生を対象とした都留文科大学体験授業」、LEG Tsuruが主催した「つるぶん授業フェス 2024 in Winter」の実施、そして、先進的な教育実践の事例研究として実施した徳島県・神山まると高等専門学校への視察を行った。

（１）子ども公開講座 VR体験・レーザーカッターでデジタル工作

□目的

子ども公開講座は、都留市教育委員会の「放課後子ども教室」事業との連携で行われており、本学の市民公開講座の一環として複数講座を開講している。本講座は特に、子どもたちが最新のデジタル機器を体験することで、情報機器やこれからの社会に興味を持ってもらうことを目的としている。

□実施方法

放課後子ども教室に参加している小学生を対象に、本学 THMC 3 階のデジタルコモンズにて実施した。

本講座は以下の日程で行った：

2024 年 11 月 30 日（土）10:00～12:00

小学校 1 年生～6 年生 定員 20 名

2024 年 11 月 30 日（土）14:00～16:00

小学校 1 年生～6 年生 定員 20 名

午前と午後の 2 回に分けての実施であったが、どちらの回も定員を満たし盛況のうちに終えることができた。

□実施内容

実施内容は、子どもたちに自作の絵や文字を書いてもらい、それを木片の表面に彫刻することでキーホルダー型のオブジェを作成した。実施日が年末に近かったため、クリスマスツリーに飾るリースを想定し、本学デジタルcommonsに設置しているレーザーカッターを用いて彫刻を行った。レーザーカッターとは、コンピュータで作成した画像ファイルをもとに、レーザーの力で切断や彫刻を行う機器である。作成する画像ファイルにおいて、赤色の線は切断を意味し、黒色の線は彫刻となる。そのため、コンピュータを用いて画像を作成するのが一般的な使い方である。今回の講座が20名の人数であること、またコンピュータを用いて子ども達に絵を書いてもらう作業はハードルが高いことから、今回はA4のコピー用紙に各々絵を書いてもらい、それをスキャナーで読み込むことでデジタルデータへと変換した。赤と黒の色分けを細かく指定するのは困難なため、周りの縁取りは赤色の線で作り、その中に子ども達の絵を黒で配置した。また、糸を通すための小さい穴もつけた。素材はMDFという合板を使用している。

以下に、レーザーカッターで作成したツリー、そして子ども達が書いた絵のリースオブジェの一部を示す。



一般的にデジタル機器を用いた活動の場合、個々人の取り組みに帰結することが多いため本講座では個々人の制作物を合算して1つの大きなものにするのを主眼として実施した。

本講座において、子どもたちの書いた絵のデジタル化、レーザーカッターでの出力に関しては40分程度の時間を要するため、完成までの間にVR視聴体験を行ってもらった。VRは専用のゴーグルを頭にかけて、ゴーグルについているレンズを両目に合わせて視聴する機材である。視聴する画面はゴーグルの向きに合わせて360度移動するようになっている。そのため、従来型のディスプレイによる視聴ではあくまでも1場面を見せられる受け身的なインタラクションとなるが、VRゴーグルによる視聴は視聴者側の視点に応じて場面が変わるため、その場で体験しているような没入感を強く感じることができる。子どもたちには海の中や空を飛んでいる景色など普段経験できない場면을視聴してもらうことで、日常における環境だけでなく広い社会を想像してもらい、創造力を働かせるきっかけになることを期待した。

最後に、レーザーカッターで自分の名前を彫ったアクリルプレートを作成した。アクリル板はコロナ禍において食堂で使っていたものが廃棄されていることから、それを再利用することで子どもたちに社会的課題への関心とものづくりの楽しさを感じてもらうきっかけとした。

レーザーカッターでアクリル板に文字を彫刻すると溝が彫られる。その溝に油性ペンで色を塗り、最後に表面を食器洗剤やアルコールで軽くふき取り完成とした。子どもたちの個性に応じた色分けをすることができ、お互いに見比べることで他者への共感力も養われたことと思う。



今回の講座は 20 名の制限としたため抽選となった。そのため、抽選に漏れた子は後日ご両親と一緒に本学へ来校された方もいた。大盛況のうちに終わることができ、今後への継続性が大いに感じられる講座となった。

(2) 中学 2 年生を対象とした都留文科大学体験授業

□目的

中学 2 年生を対象とした都留文科大学体験授業は、都留市教育委員会主催のイベントであり、都留市内の中学 2 年生を大学へ招きキャンパスツアーや体験授業に参加するものである。大学での学びを通して、中学生の学習意欲の向上を図ること、そして「教育首都つる」の推進のため、中学校と大学との連携強化を図ることを目的としている。

□実施方法

本学 4101 階段教室にて中学 2 年生を対象とした模擬授業を行った。中学校ごとに 2 日間に分かれ実施した。詳細は以下の通りである：

2024 年 9 月 19 日（木）13:30～16:00

都留一中 68 名，東桂中 48 名

2024 年 9 月 20 日（金）13:30～16:00

都留二中 106 名

□実施内容

当日はキャンパスツアーや卒業生メッセージなどが企画されるなか、大学講義を担当した。授業内容は「情報科学ってなんなの？」というタイトルで両日 1 時間の授業を行った。高校において情報Ⅰが必修化され、中学校においても情報科学の系統的な学習が求められるようになってきた背景を鑑み、情報科学という分野がどのような内容を扱い、目的をもっているかについて講義した。情報科学というと、一見コンピュータに関連すると思われるが、簡単な手品を見せたり、また暗号文や回文を作って考察をあたえてみるなど、実習的な取り組みで実施した。

また、これからの社会を生きていく中で、最新技術に触れてもらう必要性も考慮し、3D プリンタによる出力や VR 視聴体験も行った。VR とは人工的に作られた仮想空間を現実かのように体感させる技術で、人間の五感を同時に刺激することで仮想空間への没入感を与える。一

一般的な用途としては、普段体験できないものを対象としており、たとえば手術の練習や危険物の扱い、地震体験や海外旅行などがある。これらを体験することで、社会課題への関心を高め、他者への協調性を養い、論理的思考力と創造力を育むことを期待した。

1時間だけではあったが、中学生からは興味深く受講できた感想があり、これからの学習や将来への起点になることを期待している。

(3) LEG 都留主催「つるぶん授業フェス 2024 in Winter」

「つるぶん授業フェス 2024 in Winter」は、学生団体 LEG Tsuru の運営のもと、教育現場における ICT の実践的活用を促進し、学生、教員、そして地域教育関係者からなる学習コミュニティの醸成を目的として開催された。

□ イベント概要

本イベントの基本情報は以下の通りである。

項目	内容
イベント名	つるぶん授業フェス 2024 in Winter
開催日程	2024 年 12 月 20 日（金）～ 12 月 22 日（日）
会場	都留文科大学 5 号館 5201 教室
対象者	学生、教員、その他教育 ICT に関心を持つ関係者

□ 各日のプログラムと成果

第 1 日目：12 月 20 日（金） - 生成 AI ワークショップ

初日は、生成 AI をテーマとしたワークショップを実施した。本学の学生を主対象とし、特にこれまで生成 AI に触れたことのない初学者向けに、アカウントのログイン方法から基本的な仕組みの解説、そしてその活用可能性を探る内容で構成された。この取り組みは、急速に進化する最先端技術に対する学生のデジタルリテラシーを高める上で、極めて重要な機会となった。

第 2 日目：12 月 21 日（土） - Canva ワークショップ

2 日目は、デザインツール Canva をテーマに、学生が主体となって運営するワークショップ形式で実施された。Canva Japan からの公式配信をオンラインで視聴した後、都留会場独自のワークショップを展開した。参加者は実践的なデザインスキルを習得するとともに、学生がイベントの企画・運営を担うことで、リーダーシップと実践力を養う貴重な成果が得られた。

第3日目：12月22日（日） - LEG Tsuru 教育対話イベント

最終日は、LEG Tsuru のメインイベントとして、全国で活躍する教育実践者を招いた教育対話会を開催した。会場では、360度カメラ・マイク・スピーカーが一体となった「Meeting Owl」を活用し、臨場感のあるハイブリッド配信を実現した。招待ゲストとして以下の専門家を迎え、学生や地域の教育関係者が ICT 教育の第一人者と直接意見交換を行う貴重な機会を提供し、参加者の専門的知見を深める上で大きな成果を上げた。

- ・ 佐藤 邦享 先生（藤村女子中学・高等学校 教諭）
- ・ 中川 琢雄 先生（東京成徳大学中学・高等学校 教諭）
- ・ 斎藤 マヨネ 先生（横浜市立金沢高等学校 教諭）

学生や地域教育者との連携を深める本イベントと並行し、当部門は全国の先進事例研究も推進した。

（4）先進事例視察報告：徳島県・神山まると高等専門学校

当部門の重要な機能の一つに、全国の先駆的な教育機関を特定し、その実践から学ぶことがある。地域活性化と教育を高度に融合させた成功モデルを理解することを目的とし、徳島県の神山まると高等専門学校への視察を戦略的な調査研究活動として実施した。特に、過疎地域の再生と最先端の技術教育を不可分に結びつけた同校のモデルは、同様の課題を抱える都留市と本学にとって示唆に富む事例であると判断し、視察先を選定した。

□視察の目的と概要

視察の主要な目的と概要は以下の通りである。

項目	内容
視察目的	地域創生と連携した先進的な教育モデルを調査・分析し、本学の教育・研究活動への示唆を得る。
視察先	神山まると高等専門学校
所在地	徳島県神山町
視察日	2025年1月31日
視察担当者	日向 良和、野中 潤

□教育実践と地域連携の特長

視察を通じて明らかになった、同校の教育実践と地域連携における主な特長は以下の通りである。

- ・テクノロジーを基盤とした学習環境 同校は、Google Workspace を基盤とし、生成AI(ChatGPT)、クリエイティブツール(Adobe Creative Cloud)、プロジェクト管理ツール (Slack) を有償版で全学生に提供することで、高度なデジタルネイティブ環境を構築している。これは単なるツール導入に留まらず、学習と共同作業の効率を最大化する戦略的な IT インフラ投資と言える。
- ・実践を重視した施設とカリキュラム 校舎はガラス張りの開放的な設計で、学習の様子が可視化されている。学生が企業と連携して設計・製作した可搬式駐輪システム「モバイルエコサイクルTM」が実際に活用されているほか、技術室には大型 CNC 切削機「ShopBot」などの高度な機材が完備され、学生が実践的なものづくりに没頭できる環境が整っている。
- ・地域課題解決と一体化した教育モデル 同校は神山町の地域再生プロジェクトの中核として設立されており、教育活動そのものが地域創生と不可分に結びついている。地元の食堂「かま屋」やオンデマンド交通サービス「まちのクルマ Let's」といった地域の取り組みと連携し、学生が地域課題の解決に直接関わる仕組みが構築されている。
- ・主体的な学習者を育む文化 学生たちは昼食の時間にも自らのプロジェクトについて活発に議論を交わすなど、学習と生活が一体化した主体的な学びの文化が根付いている。学生との対話からは、「何を学ぶか」だけでなく「誰と、どこで学ぶか」という環境要因を重視する姿勢がうかがえ、自律した学習者としての成長が促されていることが確認できた。

□ 本学への示唆と今後の展望

今回の視察から得られた、本学の今後の発展に向けた示唆は以下の3点に集約される。

- i. 地域連携の深化 神山町のモデルは、教育機関が地域課題と一体化することで強力な相乗効果を生むことを示している。本学もこれまでの取り組みをさらに一歩進め、都留市が直面する課題解決や地域活性化に、より深く、組織的に関与していく必要がある。
- ii. 学内スペースの創造的活用 神山まると高専の柔軟で学生中心の空間活用は、本学の施設活用の大きな参考となる。特に、本学1号館などの既存スペースを、学生の主体的な学びや協働を促進

するダイナミックな学習環境へと転換する具体的な方策を検討すべきである。

- iii. 「学びを实践する場」としての大学機能 最も重要な示唆は、大学が「知識を学ぶ場」であると同時に「学んだ技術を実践する場」でなければならないという点である。図書館や教室といった空間を、単なる座学の間から、学生がスキルを直接応用し、プロジェクトを生み出すためのワークショップやハブへと機能転換させていく戦略的視点が不可欠である。

【2025 年度への活動の展望】

2024 年度は都留市内の小中学生に対するイベントを実施してきた。また、「つるぶん授業フェス」の開催では、学内外のコミュニティと積極的に関わり、教育 ICT に関する専門的知見を共有した。神山まると高等専門学校の前端的なモデル研究では、本学の将来の発展に有用な知見を収集することができた。これらの成果は、本学が教育イノベーションの拠点として、また地域創生の能動的なパートナーとして、今後さらに重要な役割を担っていくための確固たる基盤を築くものである。これからの不確実な未来を生きる子どもたちに対して情報教育の必要性を継続的に周知するとともに、地域向けの講座を増やすことで、地方都市におけるデジタルディバイド解消に寄与していくことも検討したい。

（文責：吉岡卓、野中潤）

Ⅱ－２－２．地域美術教育

図画工作「使って楽しい焼き物 一飾るもの・使えるものをつくる」実践報告

1. 実施概要

日 時：令和6年2月13日（火） 13:35～15:10（5・6校時）

対 象：都留文科大学附属小学校 第5学年（6名）

場 所：附属小学校 図工室

担当者：鳥原正敏（教授）、山本直紀（特任教授）

材 料：益子赤土、伊勢久マット釉

2. 活動のねらいと研究課題

活動のねらいは、子どもたちが素材の特性を理解しながら、つくり方や表現を工夫することにあります。さらに、様々な道具に触れながら発想を広げ、考え、試行錯誤を通して判断すること、楽しみながら仲間と協力し共感する姿勢を身につけること、そして日本の伝統文化やものづくりの精神を理解することを目指しました。

また、この授業は研究実践としての意味も持っています。大学教員としては、子どもたちが「どのような生活の場面で使うか」という視点から発想を広げ、粘土の特性を理解しつつ、試したり工夫したりしながら仲間と共に活動する姿に注目しました。具体的には、5校時に粘土板を使ったカップづくり、6校時に自由造形活動を行い、その後、作品を大学に持ち帰って素焼き・施釉・本焼きを行いました。完成した作品を附属小学校で手渡す際には、子どもたちの表情や反応にも着目し、学びの質を確認したいと考えました。



粘土で遊びながら学ぶ

3. 活動の様子

子どもたちは粘土で遊びながらその性質を理解し、それぞれの生活の場を思い描きながら作品づくりに取り組んでいました。活動の中では「形が崩れる」「接着が難しい」といった困難にも直面しましたが、工夫を重ね、経験や情報を仲間と共有しながら試行錯誤し、困難を乗り越える姿が見られました。その過程で新たな技能を身につけ、失敗を新たな表現の可能性として捉え直すなど、素材から学び、経験から気づきを得て主体的に学ぶ様子がうかがえました。

完成した作品を手渡す際には、梱包を解いて作品が現れる瞬間を子どもたちが食い入るように見つめ、驚きや喜びの声をあげる姿が印象的でした。また、窯変によって生じ

た思いがけない効果についても、それを否定せず「作品のよさ」として受け止める態度が見られました。この体験は、日本文化に根付く複雑な価値観である「不完全の美」を実感する貴重な機会になったと考えられます。

4. 教育的な成果

授業には、校長先生をはじめ関心をお持ちの先生方も見学に来てくださいました。一緒に子どもたちの様子を観察しながら、様々な情報や意見を交換できたことは大きな成果でした。子どもたちにとっては、やきものづくりを通して創造力・忍耐力・協働性を育み、伝統文化を理解する学びの機会となりました。大学にとっても、地域と共に学ぶ「生きた学びの場」を創出できたと感じています。

図画工作の活動は、体験的な学びを通じて将来の予測が困難で変化の激しい社会に対応できる力を育むことを目指しています。本授業もその具体的な実践の一つであり、地域の子どもたちの未来に向けた有益な学びの一助となり、持続可能な社会を支える力の涵養につながることを願っています。



参加した子どもたちと

(文責：鳥原正敏 山本直紀)

Ⅱ－２－３．地域インクルーシブ教育

1. 地域インクルーシブ教育分野の目的

地域インクルーシブ教育分野は、地域の特別なニーズのある人たち（およびご家族）への教育・心理的支援とインクルーシブな地域づくりを推進することを目的としている。
この分野の主要な活動は以下である。

- ① 特別なニーズのある人たちの週末の居場所づくりの活動 “クロボ”
- ② 特別なニーズのある若者たちのキャリア形成支援の活動 “キャリアデザインワーク”
- ③ 特別企画 “東京の病弱教育の主人公たち作品展” & “朗読・つなぐコンサート”

2. 活動の内容

(1) 特別なニーズのある人たちの週末の居場所づくりの活動 “クロボ”

正式名称は、「クロスボーダー・プロジェクト」という活動である。「健常者と障害者の境界（ボーダー）を超える」という意味で名称を「クロスボーダー」とし、かつそのプロセスとして地域の方々と「コラボ（連携）」してやっていきたいという意味で通称を“クロボ”としている。

2024 年度は、学期中、月 1 回土曜日に 10：00～15：00 で実施し、各回、小学生から社会人までの計 20～40 名程度（登録者としては、小学生 14 名、中学生 5 名、高校生 5 名、社会人 18 名）が参加してくれた。その他、午前中のホッケー活動のみ、社会福祉法人あすなろ会 みとおしの利用者さん 6 名がゲスト参加してくれた。

毎回、平均 50 名ほどの学生や市民がボランティアとして参加してくれた。例年通り、学校教育学科「特別支援フィールドワークⅠA・ⅠB」「教育フィールド研究ⅡA・B・C・D」を受講する学生も、学生ボランティアとして参加した。

計画していた年間 6 回全てについて実施することができた。

＜前期＞		
5 月 11 日（土）	【午前】 ダンス、ホッケー、フロアボール	【午後】 アート
6 月 15 日（土）	【午前】 ダンス、ホッケー、フリスビー	【午後】 アート
7 月 13 日（土）	【午前】 ダンス、ホッケー、ボッチャ	【午後】 音楽・そうごう
＜後期＞		
10 月 19 日（土）	【午前】 ダンス、ホッケー、フロアボール、スポーツチャンバラ	【午後】 音楽・そうごう
11 月 9 日（土）	【午前】 ダンス、ホッケー、フロアボール	【午後】 環境学習、そうごう
12 月 7 日（土）	【午前】 ダンス、ホッケー、玉入れ	【午後】 音楽、アート

クロボは、午前が全体活動、午後がグループ別活動としている。午前のフロアボール（5 月、10 月、11 月）については、2023 年度後期に続き、都留フロアボールクラブ Buzzle との連携で実施した。また、午後のそうごう（10 月、11 月）については、本学、都留市社会福祉協議会、地域市民とが三者で共同運営している地域活動「いこいのひろば」との連携で実施した。

各回の活動の様子については、写真とともに、大学 HP に掲載した。以下が 2024 年度の活動の様子である。

アート活動（5 月）



ボッチャ（7 月）



音楽活動（10 月）



環境学習活動（11 月）



（2）特別なニーズのある若者たちのキャリア形成支援の活動“キャリアデザインワーク”

□概要

本事業は 2015 年度からクロボのグループ活動の一つとして開催されてきた。2017 年度からは特別支援学校教職課程が開設されたことに伴い、当該課程のフィールド科目「特別支援フィールドワークⅡ」（集中講義）として位置付けられ、年間 6 回のワークを実施している。特別なニーズのある中高生や若者の将来イメージ形成に寄与する「思春期キャリア支援プログラム」として実施し、学生が当事者の将来展望の育成を目指すプログラムを企画運営するフィールド研究の場となっている。

□参加者

中高生・若者の当事者 11 名、大学生 12 名、保護者 10 名

□運営委員（地域の専門家）12名

元都留文科大学特任教授、障がい者就業・生活支援センターありす就業支援ワーカー、フリースクールオンリーワン理事長、山梨県立ひばりが丘高等学校教諭、山梨県立やまびこ支援学校教諭、山梨県立富士見支援学校旭分校教諭、山梨県立高等支援学校桃花台学園教諭、元大月市立小学校通級指導担当教諭、フリースクールにじらボ代表、保護者（放課後等デイサービス事業者、親の会「ぶどうの会」代表者）

□職場提供者

職場体験にご協力下さる事業所等は10カ所以上あるが、2024年度は更に3カ所を新規開拓し、次の6カ所で体験させていただいた。暖かい理解のもとで貴重な体験ができたことを感謝している。

就労支援センターいちごいちえ様、セブンイレブン都留文大通り店様、道の駅つるじえれーとカフェ炭香ふぁーむ様、ノジマ富士吉田店様、都留市立図書館様、都留文科大学図書館様

□ワーク実施内容

目標 ○自分はどんな大人になりたいか、仲間と一緒に考えてみよう。

○どんな仕事に向いているか、職場体験をしてみよう。

○将来の夢や希望をつかみ、今できることに取り組もう。

内容（場所：3号館または6号館）

No	日程等	内容
1	5月11日（土）13:00～15:00 保護者説明会 10:30～12:00	○Welcome to キャリアデザインワーク（昨年度の振り返り/名札づくり&自己紹介/CUPS/自己紹介すごろく）
2	6月15日（土）13:00～15:00	○かけはしの第1歩～走りだせ・走りだせ明日を迎えに行こう～（フルーツ狩りに行こうよ／プロフィールカード作り／プロフィール当て）
3	7月13日（土）13:00～15:00 保護者の語り場①10:30～12:00	○かけはしの第2歩～やったことないことも知ってみよう～（アブラハムには7人の子／身近な職業クイズ／職業当てジェスチャーゲーム）
4	10月19日（土）13:00～15:00 保護者の語り場②10:30～12:00	○かけはしの第3歩～勇気100パーセント～（聖徳太子ゲーム／模擬電話／職場体験先に電話）
5	11月9日（土）10:00～15:00	○かけはしの第4歩～なるようになるさ～【職場体験】いちごいちえ／都留市立図書館／都留文科大学図書館／セブンイレブン／ノジマ／炭香ふぁーむ
6	11月10日（日）10:00～15:00 保護者の語り場③10:30～12:00	○栄光のかけはし～終わらないその旅へ～（ビデオレター作成&撮影／思い出かるた／お疲れ様会）

□成果と課題

「参加者さんたちとうまくコミュニケーションがとれるのか、仲良くなることができるのか」…担当する学生たちにとって、毎年第1回目のワークでは特に気にかかることである。果たして、今年度の学生の感想には、「キャリアに関しては、私の方がわからないことも多く、(参加者さんに)たくさん助けてもらった」「対等に同じ世代の友だちとして接することが大切だと思った」「担当者と参加者という関わりをするのではなく、この場で出会った一人の方としてコミュニケーションを取り楽しく遊んだ」などの言葉があった。

キャリアデザインワーク生みの親である原まゆみ先生の「思春期キャリア支援プログラム実践枠組みのモデル図」には「⑥同世代の若者の関与～親和的な存在として身近な憧れモデルになれ、社会人になって当事者理解に寄与できる」とある。先ほどの学生の感想からは、これから社会に向けて歩み出す同世代の若者として、支援者ではなく参加者さんと並び立とうとする自覚が感じられる。

また、長年参加し、社会人となった今もワークに来てくださる方が増えてきた中、「憧れモデル」は学生と参加者の双方向の意味あいも生まれていると感じます。

学生たちは今年度の年間テーマを「かけはし」に決めた。参加者だけでなく学生たち自身も夢に向かう人生の真っ只中であり、共に成長し合うことで、今の自分と未来の自分への「かけはし」をかけようという願いが込められている。

全ワーク終了時には、「もっともっと関わっていたい」と涙する学生もいた。今年初めて参加した高校生が「感動しました。泣きそうです」と声を震わせ、10年以上参加している参加者が「今年は最高のワークでした」と力強く語ってくれたのは、心が深く動かされたからに他ならない。

「かけはし」というテーマは1年間を貫く軸となり、参加者は活動の主体者に、そして学生たちは集団での議論をくぐり抜けながら実践の主体者へと着実に成長したと感ずる。

年3回行った保護者の語り場もとても貴重な時間であった。キャリアデザインワークにとどまらず、クロボ（クロスボーダー・プロジェクト）や体験希望の保護者も交えて、何でも語り合い、聴き合う温かな場となった。ここだからこそ言える安心感と、何を言っても受け止めてもらえる信頼感に満たされた支え合いの場であることを実感する。

例年、年度末には全6回のワークの内容に学生レポートを加えた『キャリアデザインワーク報告書』を作成している。ぜひご覧いただきたい。

キャリアデザインワークの実践および研究が、発達障害等のある若者の学校から社会への移行期支援に活用され、さらに広がっていくことを切に願う。

(3) 特別企画“東京の病弱教育の主人公たち作品展”&“朗読・つなぐコンサート”

2024年10月25日(金)から11月7日(木)までの約2週間、「東京の病弱教育の主人公たち作品展」を開催した。本展は、元都留文科大学特任教授・斉藤淑子氏がJSPS科研費の一部を活用して制作した冊子『東京の病弱教育の主人公たち作品集』をもとに企画したものである。

展示では、病院内教育を経験した子どもたちやその保護者の皆様から寄せられた作品

をパネルや実物として紹介。病気と向き合いながら、自分を見つめ、友や教員と共に学んだ子どもたちの思いを伝える貴重な場となった。

また、11月2日(土)には「朗読・つなぐコンサート」を開催。院内学級で学んだ子どもたちの詩や日記の朗読に加え、生徒が録音した歌声に生演奏を重ねることで、まるで皆がその場に集っているかのような臨場感を生み、感動的なフィナーレとなった。

会期中の来場者は、本学の学生・教職員をはじめ、教育・福祉関係者、地域住民、さらには作品の作者やそのご家族を含め、延べ240名にのぼった。

来場者の感想をいくつか紹介する。

- ◆教員になる前にお話を聞いたり、みんなの作品を見たりすることができてよかったです。病弱教育の学びの場は、私が考えている以上にすごいパワーがあるんだなと思いました。
- ◆仕事柄、病院に長期入院されているお子さんと接することがあります。作品を通して、彼らの希望や生きる力への描写に触れることができました。
- ◆「昨日全ての作品をじっくりみましたが、今日改めて朗読で聴いて「自分と向き合う」ということの大切さを感じることができました。当事者の「戦友」という言葉も印象に残りました。」
- ◆「とてもステキなコンサートでした。やさしい時間が流れ、生きる強さとキラキラが伝わってきました。」



3. その他

2024 年 12 月 10 日（火）、地域インクルーシブ教育分野は、令和 6 年度「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰の功労者表彰を受賞した。本表彰は、障害者の生涯を通じた多様な学習を支援・実践する活動およびその活動を行う個人または団体について、その内容がほかの模範と認められるものに対しての功労・功績をたたえる表彰となっている。



今後も大学内の学生や教職員、地域の市民・団体と共同して活動することに重点を置いて取り組んでいきたいと考えている。

（文責：堤英俊、山本剛、佐藤比呂二）

Ⅱ－２－４．社会教育

社会教育分野について

共生教育研究部門の社会教育分野は、地域における多様なエージェントを巻き込みながら、それらがつくりだす共同学習の支援を旨とし、とりわけ、都留市内に新たな成人教育の場を創出し、そこに高等教育機関としての本学がもつ学問知をつなぎ合わせることを目的とする。

1. 2024 年度の活動：「つるぶん café」の開催

(1) 活動の趣旨

「つるぶん café」は上記のことを目的として都留市内の喫茶店を会場とし、現代社会の問題や文学・芸術にまつわるさまざまなテーマを企画して地域住民、喫茶店オーナー・スタッフ、学生、講師が共に学び合う中からその後の関係につながるような場を提供する。

2019 年度に初回開催後、コロナ感染症拡大のため中止となっていたが、2021 年度はオンラインで実施（「性の多様性ってなに？」）、2022 年度以降対面での開催（2022 年度「ポエトリー・ミーティングー中原中也の詩を読む」、2023 年度「短歌の言葉、わたしの言葉」）が再開された。

(2) 2024 年度「つるぶん café」の概要

日 時：2025 年 1 月 11 日（土）14:30～16:30

テ マ：あまねく、俳句—わたしを自由にする言葉

講 師：神野紗希（俳人、俳句雑誌「noi」代表）

場 所：バンカム 2 階

定 員：20 名（学生補助 4 名を含む）

事前申込：必要

参 加 費：無料（飲み物一杯の注文を参加者をお願いする）

(3) 2024 年度の総括と 2025 年度に向けて

2024 年度の企画は、現代俳句作家として活躍される神野紗希さんをゲスト講師にお招きして、俳句の創作と俳句の味わい方についてフリートークを交えながらお話を伺った。参加者はこれまでに俳句を嗜んできた学生や地域住民だけでなく、この機会に俳句の詠み／読み方を学びたいという人もいた。神野さんには参加者も自由に発言できる空気を作っていただき、お店の許可を得て延長するほどトークは盛り上がりを見せた。

「つるぶん café」の趣旨は以下の点にある。市内の喫茶店を借りて教室とは異なるリラックスした空間と近い距離をつくること、それほど多くない人数のささやかな集いであること、講師が一方向的に学問知を押しつけるのではない双方向的なやり取りや遊びがあること。こうした趣旨に沿う形で、引き続き広報の仕方を工夫し、ここ数年文学分野に偏っていた企画内容について見直す必要がある。

2. フィールド・ミュージアム・スタディーズ編集部

(1) 2024 年度の活動

「総合的な学習の時間」を中心に、フィールドを舞台とした豊かな地域学習実践を展開している事例を、学生が自ら現地に赴き、取材し、記事化することを通して、①教職への理解を深め、自身がどういう教師として働いていけそうかという像を描くきっかけとすること、②また、地域学習を支える地域の関係者や地域資源に目を向けることで、地域づくりに対する関心を深める機会とすることを目的とした。

2024 年度は上野原市秋山地区をフィールドとした。参加学生を 4 グループに分け、グループごとに地域行事や学校行事の取材、小中学校の先生方、子どもたち、地域の方へのインタビューを行い、記事の編集作業を進めた。

(2) 2024 年度の概要

全体で参加した行事、授業参観は以下の通りである。

2024 年	7 月 27 日 (土)	秋山マス釣り教室への参加
	9 月 20 日 (金)	上野原市立秋山小学校の授業参観
	9 月 24 日 (火)	上野原市立秋山中学校の授業参観
2025 年	1 月 26 日 (日)	「秋山の魅力展」の取材

そのほか、グループごとに、秋山小中学校の先生方、児童・生徒へのインタビュー、コミュニティスクールサポートクラブに所属する地域の関係者の方へのインタビュー、山梨県富士・東部教育事務所の方へのインタビューを行い、グループごとに記事の編集作業を進めた。また、月 2～4 回程度の編集会議を実施した。

(3) 2024 年度の総括と 2025 年度に向けて

2024 年度の取材をもとに、現在『フィールド・ミュージアム・スタディーズ』の編集作業を進めている。2025 年冬に発行予定である。

また、2025 年度は甲州市勝沼地区をフィールドとし、小中学校の先生方や、社会教育施設の関係者の方、児童・生徒、地域学習を支える地域の関係者の方々への取材を実施していく。

(文責：吉田恵理、邊見信)

Ⅱ－３．まちづくり研究部門

まちづくり研究部門の目的

まちづくり研究部門では、持続可能なまちづくりを学生とともにデザインし、地域住民や自治体、地元企業等と連携しながら実践活動に移し、実社会での学びの機会を創出することを目的としている。学生自らが地域社会の課題を捉え、その解決策を考え実践活動につなげ、これからのまちや地域社会のあり方を考察する機会を創出するとともに、地域に対する関心を高めることを目的とする。2024年度は、富士急行株式会社・都留市と連携し、谷村町駅舎を活用した地域づくりプロジェクト「ぷらっとはうす」及び都留市におけるサイクリングロードの創出、の2プロジェクトを実施した。

1. 富士急行線谷村町駅舎を拠点にした地域連携のまちづくり「ぷらっとはうす」

(1) 目的

本プロジェクトは、谷村町駅舎を拠点に地域と大学生との交流・学び・まちづくりの拠点を創出し、中心市街地の賑わいづくりに寄与するとともに、地方鉄道を持続可能なものとして市民が支えるしくみづくりを試みることを目的とする。

(2) 事業名称・事業主体

全体事業名

産官学民連携による「谷村町駅舎を活用した地域づくりプロジェクト」

事業主体（下記5者による協働連携）：

- ・早馬町自治会
- ・富士急行株式会社
- ・都留文科大学教養学部地域社会学科 鈴木健大オープンゼミ
- ・都留市
- ・生涯活躍のまち・つる推進協会

(3) 実施方法

地域社会学科鈴木健大担当による、全学部全学科の学生を対象にした、オープンゼミとして実施

(4) 実施内容

谷村町駅における放課後の子どもたちの居場所づくり「ぷらっとはうす」を実施した。

2018年12月、駅舎旧宿直室をリノベーションし、無人駅を地域活動拠点の一つとすべく開始したが、2020年からのコロナウイルス感染拡大を受けて、その後3年間は閉鎖や制限を受けた中での活動であった。その後、2023年度からコロナ対応の制約から解放され、徐々に通常の活動に戻っていった。

2024年度は、参加する子どもたちや大学生の数が増えたことから、毎週水曜日に加え、6月後半から毎週金曜日も開催することとした。駅舎におけるこれら定期的開催では子どもたちが6,7人ほど、多い時は10人ほどが集まり、6畳2間のスペースは賑わった。このほかにも、地域の田植え参加、七夕祭り、流しそうめん大会、夏休み宿題教室、文化祭、クリスマス会等を実施した。

- ①「ぷらっとはうす」(於：富士急行線谷村町駅)
4/12(水)～2/21(水) 毎週水・金曜日 15:30-17:00、計42回
宿題の手伝い、ゲーム、お絵描き等
- ②「第55回つる子どもまつり」(於：都留文科大学)
5/12(日) 10:00-15:00 「くに企画」出展
- ③田植え体験(於：田野倉)
5/24(金) 25(土) 26(日)
- ④「七夕祭り」(於：ふるさと会館)
7/7(日) 14:00-16:00 七夕飾りづくり、短冊飾り、クイズ、星つきゲーム
- ⑤「夏休み宿題やつつけ隊」(於：富士急行線谷村町駅)
8/6(火)、9:30-11:30
- ⑥「流しそうめん大会」(於：上谷交流センター)
8/7(水)、11:30-13:30
- ⑦稲刈り体験(於：田野倉)
9/27(金) 28(土)
- ⑧「クリスマス会」(於：ふるさと会館)
12/15(日) 14:00-16:00 クリスマスハットづくり、輪投げ、ボウリング

(5) 2024年度を振り返って

2024年度は、コロナ禍を経て、ようやく参加人数や実施内容がそれ以前に戻った年となった。実施回数が週2回となり、流しそうめんが復活した。学生間でも新歓イベントを実施したり、桂川祭に出店したりして、交流がはかられた。

大学生にとってはこれまでの活動にとらわれず、まちなかのこの拠点を生かして、また、多くの方々の協力が得られたこの恵まれた環境を活かして、中心市街地の活性化に今後も幅広く精力的に取り組んでいってもらいたい。

参加学生 計69名

地域社会学科39名、英文学科2名、国文学科6名、比較文化学科8名、
学校教育学科11名、国際教育学科3名



「ぶらっとはうす」の様子（2024年8月）



「七夕まつり」の様子（2024年7月）



「流しそうめん大会」の様子（2024年8月）



「クリスマス会」の様子（2024年12月）

2. 富士急行線沿線の活性化を目指した観光まちづくりの実践

（1）目的

山梨県では、第二次山梨県自転車活用推進計画（2023年4月改定）を策定し、「サイクル王国やまなし」の実現を目指している。自転車活用をまちづくりや観光、健康増進、スポーツ振興等に活かすことを目標に掲げているが、都留市においては施策策定や事業実施の段階になかった。一方、富士急行では、サイクルトレインの運行を行なっているが、その周知や利用が十分に進んでいなかった。

そこで本プロジェクトは、2023年度に続き、都留市内にサイクリングの舞台となる新たな観光資源を発掘し、サイクリングコースとして地図にまとめ、市内サイクリングの可能性について提案することを目的とする。

（2）実施方法

地域社会学科鈴木健大ゼミ4年生及び2年生「フィールドワーク」に基づくゼミ形式で実施。

(3) 実施内容

2024 年度は、都留市内に 3 本のサイクリングコースを提案し、マップにまとめた（内 2 本は英語版も作成）。

前期は、富士急行及び都留市による講義、観光やマーケティングに関する基礎学習、市内フィールドワークを行い 5 つの企画案を作成、7 月下旬に富士急行及び都留市にプレゼンテーションし、採用になった 3 案を今後マップ化することとなった。

夏季休暇から後期にかけてフィールドワークや取材を重ね、サイクリングのテーマについて考察を深め、11 月中旬、完成した 3 本のサイクリングコースマップを富士急行及び都留市にプレゼンテーションした。

フィールドワークに際しては、都留市から電動自転車 5 台を借り受けた。

制作した 3 本のサイクリングコースマップはいずれも年度末に印刷を行い、市内各所に設置、本学においてもオープンキャンパスや出前授業等で活用していくこととなった。

①ゼミの実施

定例ゼミ：4/15（月）～11/25（月）、毎週月曜日 18:10-21:00、計 24 回

実施内容：富士急行及び都留市講義、統計や輪読による観光に関する基礎学習、マーケティング基礎学習、自転車を活用したツーリズム先行事例調査、地域（SWOT）分析、企画立案、企画プレゼンテーション、マップ制作

②企画提案会の開催

7/22（月）、18:15-19:45

調査中間報告、地域（SWOT）分析報告、サイクリングコース案の提案、採用案の決定、意見交換

③最終報告会の開催

11/25（月）、18:15-19:45

サイクリングコースマップの発表、意見交換及び振り返り

④サイクリングコースマップの制作・印刷

- ・「レッツ！ベーカリング！ 都留パン図鑑」
- ・「都留の春風に乗って ひらひら桜めぐり」 *英語版も発行
- ・「城下町にタイムトラベル!? 都留史辿リングマップ」 *英語版も発行

(4) 2024 年度を振り返って

2020 年度から 2022 年度はマイクロツーリズムを企画提案し、販売してツアー運営を行なって観光産業の創出を試みていたが、これまでにないツアーを企画し販売することは三者にとって負担が大きかったことから、2024 年度は 2023 年度に続き、販売に捉われない成果を目指して、地域の観光づくりに取り組んだ。

マップの制作に際し、都留市からは、フィールドワークのための電動自転車を借り受けてたり、資料の提供を受けたりした。

また、今回のプロジェクトを契機に富士急行は、都留文科大学前駅に 2024 年 2 月から電動自転車 3 台を配置し、自転車のまちづくりを開始する端緒となっている。

なお、富士急行・都留市との三者連携は、2023 年度は プロギングイベント（市内清掃活動）、AI デマンドバス実証実験（国土交通省「令和 5 年度地域交通共創モデル実証プロジェクト」採択）、2024 年度はフードバンク活動にも発展し、幅広い展開につなが

った。

観光名所や景勝地がない地域において新しい観光を創出する、といった目的に向け、これまでの経験や知見を踏まえて、三者で振り返りと改善を重ねてきたことから、年度ごとにプロジェクトが進めやすくなり、新たな事業展開につながっている。

最後に、富士急行及び都留市、フィールドワーク先でお世話になった皆様、本学職員の皆様、お世話になりました全ての皆様に感謝申し上げます。空き時間や夜間、土日、夏季休暇と、社会に新しい価値を生むことに精進した学生たちの努力には最高の賛辞を送りたい。

参加学生 計 29 名

鈴木ゼミ 4 年 12 名、2 年「実践科目」履修生有志 10 名



観光ゼミの様子（2024 年 5 月）



最終報告会の様子（2024 年 11 月）

Ⅱ－４． グローカル交流研究部門

グローカル交流研究部門の目的

地域の自然と文化の魅力を学び、また本学の留学生や多様な人びととの交流から地球規模の視野を育み、持続可能な社会のあり方をともに考えることをテーマとしている。昨年度に引き続き、2024年度も交換留学生を対象としたムササビ観察会を都留市鹿留にある今宮神社において実施することができた。ムササビ観察会は、北欧のアウトドア教育との類似性が高く、留学生にとっても比較を通じて学びの大きい活動であることから、活動を充実させていきたいと考えている。

1. ムササビ観察会

(1) 目的

ムササビは日没後30分ほどで活動を開始するため、生息場所を確認してさえおけばほぼ確実に会うことができる野生動物である。このムササビの生活を脅かさないよう少人数で観察するなどの工夫は、今泉吉晴氏（本学名誉教授）により都留市で編み出されたもので、地域交流研究センターでこの観察会を受け継いできた。本学の学生が主体的に観察会を運営し、留学生とムササビをじかに観察することでムササビの生態とともに地域の自然、世界の自然の現状についてともに考えることを目的とする。

(2) プログラムの名称

ムササビ観察バスツアー

(3) 実施方法

地域交流研究センターの自然共生研究部門で開催してきたムササビ観察バスツアーと同様の方法で開催した。本学の環境ESDプログラム履修する学生が主体となり留学生や市民を対象としたムササビ観察バスツアーを企画・運営し、国際教育学科の学生が通訳として参加した。都留の自然・アウトドア教育に関心を持つ留学生達からの申し込みがあった。

(4) 実施内容

まず、本学の環境ESDプログラム履修生のうち地域交流研究センター主催のムササビ観察会を実習先として選択した学生が、この観察会の企画と運営を担当した。事前の観察と打ち合わせ、リハーサルをするなど1ヶ月ほど準備をした。また国際教育学科の3名の学生がアシスタント及び通訳として参加したこともあり、企画・運営の学生と留学生との意見交換も実現できた。ムササビが生息している都留市鹿留にある今宮神社へは安全面を考慮してバスで移動した。神社ではムササビが生息する自然環境について説明をした後、観察を行ったが、幸いムササビが滑空する姿を確認することもできた。またムササビの生息を確認できる糞などを境内で探す活動も行った。神社での観察終了後、地域交流研究センターに戻り、学生による解説と振り返りの講座を開催した。

実施日時：2024年11月16日（土）、16時30分～18時30分

開催場所：都留文科大学地域交流研究センター

観察場所：都留市鹿留地内 今宮神社

参加者：学生スタッフ3名、留学生20名、国際教育学科学生3名、教員2名、事務局1名

2. 一年間を振り返って

国際教育学科と連携のもと、今年度もグローバル交流研究部門として自然観察会を開催することができた。2時間という短い時間ではあるが、参加者が野生動物を観察する経験を共有し交流することで地域の自然、世界の自然、アウトドア教育の在り方について考える契機となった。今後も、地域交流研究センターで蓄積してきた観察会の手法を活かして、活動を充実させていきたい。

（文責：畠山勝太・北垣憲仁）

Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動

Ⅲ－１．各種講座の開催

Ⅲ－１－１．都留文科大学現職教員教育講座

講座の趣旨

2024 年 7 月 29 日（月）に、都留文科大学夏季集中講座として「現職教職員教育講座」を開催した。

この講座は、山梨県総合教育センターが開催している「中堅教諭等資質向上研修（10 年経験者研修）」の選択講座として、同センターとの共催で 2018 年度より実施しているものである。午前の部に『道徳性の涵養』、午後の部に『教育現場におけるユニバーサルデザインの利用』の 2 講座を開講する形で実施している。

2024 年度は、午前の部を教職支援センターの阿部真一特任准教授、午後の部を学校教育学科の山本剛特任教授が担当し、県内各地の小中学校及び高等学校の教員から、午前の部 56 名、午後の部 54 名が受講した。

日程と内容

日 時：2024 年 7 月 29 日（月）

会 場：都留文科大学 THMC 6202 教室

9 時 40 分～10 時	午前の部 受 付
午前の部 10 時～12 時	『道徳性とその涵養について学ぶ研修会Ⅰ』 講師：阿部 真一（教職支援センター特任准教授） 内容：道徳性とその涵養方法、学習指導要領の目指すところについて学ぶ
12 時～13 時	休 憩（昼 食）
12 時 40 分～13 時	午後の部 受 付
午後の部 13 時～15 時	『教育現場におけるユニバーサルデザインの利用について学ぶ研修会Ⅰ』 講師：山本 剛（学校教育学科特任教授） 内容：特別な配慮が必要な児童生徒の特長と、授業のユニバーサルデザイン化について学ぶ

（文責：事務局）

Ⅲ－１－２．都留文科大学子ども公開講座

「子ども公開講座」は、都留市教育委員会の「放課後子ども教室」事業との連携により、本学の市民公開講座の一環として、2013 年度から本格的に開始された。対象となるのは、放課後子ども教室に参加している小学生で、夏休み・冬休みの期間や休日に、主として大学内を会場として開催されている。

2024 年度は6 月から11 月にかけて7 つの講座を企画し、全ての講座を開催することができた。その状況は下記の通りである。

2024 年度子ども公開講座参加人数一覧

日 程	講座タイトル	講師名	実施場所	参加者数
6 月 30 日（日） 9:30～11:30	オリンピックと走ろう！ 佐野夢加のかけっこ教室	佐野夢加	体育館	21 名
8 月 16 日（金） 10:00～12:00	重さの不思議－言うことを聞く金魚 とスノードームに挑戦しよう－	三崎隆	自然科学棟 2 階	13 名
9 月 7 日（土） 13:30～15:00	デザインアプリ Canva でおもしろいもの を作ろう！	野中潤	6 号館 303 教室 (THMC)	25 名
10 月 12 日（土） 10:00～11:30	手作り石鹸やキャンドルを作ろう	平和香子	1 号館 105 教室 (調理実習室)	18 名
10 月 12 日（土） 11:30～14:30	手作り石鹸やキャンドルを作ろう	平和香子	1 号館 105 教室 (調理実習室)	16 名
11 月 30 日（土） 10:00～12:00	VR 体験・レーザーカッターでデジタル 工作	吉岡卓	6 号館 3 階 DIGITAL コモンズ (THMC)	18 名
11 月 30 日（土） 14:00～16:00	VR 体験・レーザーカッターでデジタル 工作	吉岡卓	6 号館 3 階 DIGITAL コモンズ (THMC)	18 名

2025 年度も都留市教育委員会からの要望に応じて、様々な講座を開催する予定である。

（文責：事務局）

Ⅲ－２．学部共通科目の開講

Ⅲ－２－１．「フィールド・ミュージアム入門」

副専攻「フィールド・ミュージアム研究プログラム」について

本プログラムは、地域交流研究センターが開講する全学共通の副専攻プログラムであり、その入門的な位置づけとして「フィールド・ミュージアム入門」を開講した。地域交流研究センターでは、都留文科大学と地域をつなぐ活動と研究に取り組むための拠点として、地域全体を博物館（ミュージアム）に見立て、フィールドで人びとの暮らしやムササビなどの自然にじかに触れ、学びを深める「都留フィールド・ミュージアム」構想を推進してきた。本プログラムの特徴は、地域交流研究センターが長年にわたり蓄積してきた実践・探究活動を活かし、自然科学や人文・社会科学といった多様な学問領域を総合して地域の現代的な課題に迫ろうとするとところにある。こうしたアプローチをとおして、単なる機械的暗記とは異なる「生きた学び（知識や技能を生活のなかで活かすことができる学び）」を体験し、卒業後に地域の担い手となり得る力量の修得を目指している。したがって授業は、教室で行なう座学やフィールドワーク、観察、調査などを組み合わせて行うこととなる。

本プログラムの目標は、①地域について多様な視点と理解するための方法を修得する。②地域での交流活動や自然体験活動を企画、運営する技術、方法を実地に身につける。③フィールドでの体験を表現する力を身につける。④都留文科大学がある富士北麓地域についてのさまざまな知識を得る、とした。

この副専攻プログラムの受講を希望する学生は、必ず卒業までに「フィールド・ミュージアム入門」を履修すること、可能ならば最初に履修することを推奨し、「フィールド・ミュージアム入門」を開講した。

授業は、6名の教員が交替で担当するオムニバス形式とし、本年度は、日向良和先生、別宮有紀子先生、平和香子先生、堤英俊先生、西教生先生、北垣、が担当した。開講曜日は水曜日、6時限とした。2024年度の実講者数は29名であった。

なお、この授業では、

- ・フィールド・ミュージアムの概念を理解する。
- ・フィールド・ミュージアムを構成する幅広い視点を修得する。

ことを目標とした。

本授業では、地域の人びとの暮らしや自然、文化、教育の問題など受講者が自ら地域で学ぶ手がかりを幅広い視点から紹介し検討するために、自然や文化、地域資料の記録・保存と活用など地域を多角的な視点で捉え直し、「フィールド・ミュージアム」の概念を具体的に理解することをテーマとした。こうした学びを通して、観察する力や記録する力、表現する力の修得をめざした。

授業では、担当の先生がたがそれぞれ異なる領域から授業を構成したことが学生には好評であった。本学におけるフィールド・ミュージアムの基本的な考え方や身近な自然、地域と生活（食）、地域と共生、地域とデジタルアーカイブ、そしてワークショップなどさまざまな視点から授業を展開した。

受講した学生からは、これほど多彩な領域から地域を見つめることができてよかった、じっさいに作ったり、食べたり、外で観察したり、実物に触れたりできて地域の自然や文化への理解が深まったなどの感想が寄せられた。

来年度（2025 年度）もオムニバス形式でそれぞれの先生がたの持ち味を活かした魅力ある授業としたい。またこうした授業を受講する学生が授業を終えても参加できる活動の受け皿も準備したい。

（文責：北垣憲仁）

Ⅲ－２－２．「フィールド・ミュージアム研究Ⅰ」／「地域交流研究Ⅰ」

令和6年度のフィールド・ミュージアム研究Ⅰ／地域交流研究Ⅰは、地域研究の概念・理念を把握することを目的とし、講義と並行して履修生は各人の関心に合わせてフィールド（地域）を特定し、そのフィールド（地域）の特色を把握すべく主体的に調査することを目的とした。

フィールド（地域）研究の概念・理念の理解については、従来行ってきた講義を踏襲して、地理学、人類学および地域研究の文献を中心に講義を行った。また「地域」の重層的複合的かつ可変可能な枠組みについて、オセアニアの海域を生活圏とする島嶼地域の事例を取りあげた。今年度は「地域が剥奪される」とことと「地域を創出する」とことについて、文献に即して詳しく講義することはしなかったが、履修生たちが取り組んだカナダの事例について補足解説した際に、先住民や移民の立場からの「地域」の剥奪と創成について指摘し、考察してもらった。

従来は履修生の地元について地域交流事例を調査してもらってきた。しかし今年度は個別に調査をする自信がない学生もいたため、履修生同士で話し合ってもらい、共通の関心地域があれば共同で調査をする、なければ個別に関心地域について調査する、の2つの選択肢を提起した。結果、「カナダ」をフィールドに選定して、全員で調査していくことに決定した。

フィールドを把握するために必要な項目を履修生たちが話し合っ出て出し合い、それに各自の関心項目をすり合わせながら、調査項目を決定していった。地理・地形、地質の特徴、植生などの自然条件、主要産業、言語分布や多言語状況の把握、教育政策、食文化、先住民、移民史など10程度の項目の調査をすすめながら、項目同士の紐づけを行いつつ、項目を絞りこんだ。カナダの州区分をすり合わせて俯瞰的に把握するために地図に落とすなど、履修生たちは意見交換して工夫しながら調査結果をまとめていった。履修生たちにとっては未知のフィールドについての調査となったが、旅行や留学先として関心をよせていた地域でもあり、手探りながらもカナダ全体を理解しようと試みていた。それぞれの関心項目にバラつきがあったことが、結果としてカナダを多角的に把握するために役に立ったようである。フィールドを把握することの難しさと、フィールドが見えてくる面白さを実感できたのではないかと思う。

（文責：重富恵子）

Ⅲ－２－３．「フィールド・ミュージアム研究Ⅱ」 / 「地域交流研究Ⅱ」 －生きもの地図をつくる－

フィールド・ミュージアム研究Ⅱ/地域交流研究Ⅱでは、2011 年より前期に「生きもの地図をつくる」をテーマに、身近に見られる生きものの分布調査を実施している。定量的な調査をおこなうことで、季節の変化にともなう生きものの動態を把握し、ここで得られた情報を地域に公開する手法を学び、生きもの地図が地域交流に果たす役割を考察することが授業の目的である。

例年、受講希望者が多いため、教室の机の数から受講生の人数を 20 名程度に調整している。20 名ほどでツバメ、イワツバメ、ハルゼミ、カエル類の調査を実施した。6 班（1 班は 3～4 名ほど）にわかれて調査をするが、事前に用意した簡易図鑑を配布し、生きものに詳しくない学生にもデータが取れるように配慮している。

生きもの地図を作るにあたっては、対象とした種の識別とその生きものがいつ、どこに、どのくらいいたのかを把握することが重要になる。種名が不確かで数量的な記録を伴わないデータは情報量が乏しい。そのため、調査対象の種を正確に識別し、個体数を記録することが重要である。

この授業では野外に出て調査をすることに重きを置いている。生きものに関する知識は、本やインターネットを介して、室内に居ながらにして触れることができるが、自分の足を使って得た情報はとても大事で、直接的な多くの学びはこのような経験のなかにあると考えるからである。受講した学生には、大学周辺の身近な自然に触れ、その意味を考える時間を持ってもらいたいと願っている。

野外での調査を通して調査対象を知り、調査結果から明らかになったことを理解し、その成果を公開することには、どのような意味があるのだろうか。自分たちがおこなった調査から得られた情報を多くの人々に知ってもらうための工夫の仕方、その楽しさ、重要さに実体験を通して気づいてもらいたい。

ツバメ類やハルゼミについては、これまでの結果と大きな違いはなかった。ハルゼミはアカマツ林でよく見られるセミ類である。都留市や周辺部ではマツ枯れが進んでおり、ハルゼミの個体数の減少が予想されたが、これまでの結果はこの予想に反している。個体数への影響がすぐに出ない場合もあるため、今後もモニタリングを続けたい。カエル類の調査では、トノサマガエルが 1 箇所を確認された。トノサマガエルが確認された水田は周辺を道路や宅地に囲まれており、この水田がなくなるとトノサマガエルの生息地は消滅すると考えられた。これからは希少種や外来種の分布状況についても調査をおこない、その結果を学内はもとより都留市内にも広く公開していきたいと考えている。

生物多様性の保全が国際的な課題として認識される時代であるが、その取り組みは身近な生きものへの関心なしには始まらない。授業で生きものに触れる経験がその一助になれば幸いである。

（文責：西教生）

Ⅲ－２－４．「フィールド・ミュージアム研究Ⅲ」／「地域交流研究Ⅲ」

フィールド・ミュージアム研究Ⅲ／地域交流研究Ⅲは都留市域をフィールドとして取り上げ、設定したテーマに沿って地域を把握し、地域から学ぶことを目指している。

令和６年度のテーマは「都留市内のボランティア活動、市民・住民活動」で、都留に住む住民、市民の活動を調査・分析して、ミュージアムとしての都留の特徴を明らかにすることを目標としていた。そのため市内で実施されているボランティア活動について、まずどんな団体が存在しているのかを調査し、活動内容をもとに学生たちが分類分けして、大まかな傾向を把握するところから始めた。

多くの活動団体があることが分かったが、環境分野の活動を行う団体の比率は小さく、自然豊かな都留市には環境関連の活動団体が多いだろうと予想していた受講生たちにとっては、意外な結果となった。この作業を通していろいろな疑問が出され、フィールド調査としては良いスタートになった。

その後受講生間で議論・意見交換を重ねた結果、受講生全員が都留市に知見を持たない１年次生であったことを踏まえ、想定していたテーマ「ボランティア活動、市民・住民活動」に沿った調査を行うのではなく、都留市の概況を把握することを優先した調査を行うことに方針を転換することになった。

地形・地理、人口分布や交通網、公共施設や教育機関などの立地、町並みや歴史、福祉の取り組みなど、８から１０のテーマを受講生たちが設定して、手分けして調査が実施された。

図書館３階特別資料室にある都留市史や郷土に関する文献に目を通して、都留市が形成されるまでの歴史的背景をていねいに押さえていたことが印象的であった。また病院や歯医者者の分布図を作成するなど、其々の関心事項について調べた結果を地図上に落とし込んでいくことで、都留の地形的特徴や地域間の違いなどを浮き彫りにすることができた。今年度は報告書の作成ではなく、地図作成を中心にして俯瞰的に都留市の状況を把握し、これに基づいて調査結果を発表する形をとった。

受講生たちはデータ収集と分析自体をやったことがなかったため、一次情報や素データを「見る」「見取る」「掘み出す」「解析する」といった、データ分析の基本要件を説明することに時間を割いた。一つ一つの素データを整理しつつ、紐づけし、他のデータとすり合わせて「意味／意義／特徴」を明確化するという一連の作業については、概ね理解できたのではないと思う。具体的な交流活動事例などに落とし込んだ調査には至らなかったが、都留市全体を俯瞰して特徴を把握することができ、都留というフィールドについての理解を進めることができたと思われる。

(文責：重富恵子)

Ⅲ－２－５．「地域交流研究Ⅳ」 ―地域の自然を観察し記録する―

これまでの経緯

2020年度まで「地域交流研究Ⅳ」は、地域の自然や文化をテーマとした観察・記録を行い、それを記事にまとめるという授業をしてきた。地域での体験を言語化し、それを互いに読み合い、最終的には冊子として市民に届けることで学生の地域についての学びを深め、市民との交流を生み出すことを目標とした。

2021年度から文学部3学科横断履修モデルの科目として位置づけられたこともあり、「地域を観察し記録する」という目標は保ちつつ、地域交流研究センターのフィールドでもある富士山北麓の動物を含む地域の身近な自然の理解をテーマとした授業構成とした。

2024年度もキャンパス周辺でのフィールド・ワークを取り入れた授業構成とし、フィールドでの安全を考慮したうえで受講者を30名に調整し授業を行った。

科目概要

世界的に地球温暖化や再生エネルギーなど環境に関する問題の解決は喫緊の課題となっている。こうした環境問題の解決には、まず地域の自然について理解を深める必要がある。本授業は自然に恵まれた本学の特徴を生かして「身近な自然」の理解を深めることをテーマとした。なかでも哺乳類を中心とした生活の痕跡（足跡や食べ痕など）から動物の生態や行動を読み取る手法を学んだり、自然との共生のあり方や富士山周辺の自然の現状について具体的に理解したりすることをめざした。このような授業を通して、観察する力や体験を言語化する力、プレゼンテーションする力を修得することを目標とし、授業は、座学による講義とキャンパス周辺をフィールドとした自然観察を組み合わせで行った。

なお本授業の2024年度の受講者数は、30名である。地域交流研究センターがフィールドとする本学を含む富士山北麓地域の自然環境を対象に、地域を理解するとはどういうことかを具体的な事例をもとに考察することをテーマとした。授業ではじっさいにキャンパス周辺の自然に触れ観察し親しむことから始め、動物の生活痕（食べ痕や糞、足跡など）から森と動物との関係性について理解を深める授業内容とした。特に全国的に農業や林業など環境面だけでなく社会的な問題にもなりつつあるニホンジカやイノシシなど大型哺乳類との共存の課題には地域住民との交流を重ね解決を図る取組が欠かせない。自然に親しみ、生きものの関係性に着目して自然の仕組みへの理解を深め、地域の自然の課題を市民との交流を通して解決していくにはどうしたらよいかを考察することに重点を置いて授業を展開した。また、本授業での経験を含めた自然への理解を、卒業後の生活にも活かせる「生きた学び」、つまり地域の中での事象や活動に直接触れることで、地域・技能を生活の中で活かすことができる学びを体験し、学びを深めることを目指した。

授業後、次のような感想が寄せられた（一部抜粋）

- ・座学と異なりフィールドでの経験は貴重だった
- ・フィールドに出て学ぶ授業が本学には少ないのでよかった
- ・高校で「種」などの概念は学んだが、それがじっさいにどのような意味なのかを具体的に学べた
- ・生き物や自然との共生は言葉では理解できるものの体感では理解していないことに気づけた
- ・森のなかを久しぶりに歩いた。大学生活のなかで身近なものに目を向ける面白さが理解できた
- ・新鮮な体験だった。この経験を通して子ども時代に興味を抱いていたことを思い出せたのが嬉しかった

来年度（2025 年度）は、本授業は開講しない。しかし本授業の理念と経験を副専攻「フィールド・ミュージアム」研究プログラムの授業に採り入れ、キャンパス周辺でのフィールド・ワークを取り入れた授業を実施する予定である。受講生のなかにはフィールド・ワークをするにはまだ受講者数が多いように思うという感想も寄せられている。できる限り多くの学生の受講希望を受け入れながら、本学のフィールド・ミュージアムの理念にそった授業を展開したい。

（文責：北垣憲仁）

IV. 地域貢献活動

IV－１．山梨県南都留地域教育フォーラム

概 要

南都留地域教育フォーラムは、「地域の子どもたちは、地域で育てる」という基本理念のもと、この地域の教育関係者が一堂に集まり、『連携活動』『交流活動』を軸に、報告と意見を交わす場として開催されている。毎年、教育委員会・校長会・教頭会のほか、各学校・幼稚園・保育園やPTA及びPTA連絡協議会、保育所保護者会、青年会議所、商工会議所、商工会など数多くの団体の参加者により、様々な立場から意見交換を行い、今日的な課題への対応や解決を目指す機会となっている。

2024年度は11月6日（水）に参集型で開催された。全体会と2つの分科会を実施し、4つの実践提案およびパネルディスカッションを行った。第一大分科会では、「誰一人取り残されない教育」のテーマで、富士吉田市立第四保育園・富士吉田市立マザーズホーム、都留第二中学校から2つの実践提案が行われた。第二大分科会では、「地域との連携」のテーマで、都留市生涯学習課、総合型地域スポーツクラブ“クラブ富士山”（富士河口湖町生涯学習課）から2つの実践提案が行われ、その後のパネルディスカッションでは活発な意見交換が行われた。

2024年度 「南都留地域教育フォーラム」 全体会テーマ一覧

全体会 「子どもたちの教育は 地域全体で担う」 ～みんなで育む 地域連携・地域交流～	【第一大分科会】 「誰一人取り残されない教育」 ～多様性が認められる教育～ ・富士吉田市立第四保育園 園長 堀内 いづみ 富士吉田市立マザーズホーム 園長 渡邊 規子 ・都留第二中学校 校長 梶原 満 パネリスト：富士北稜高等学校 生徒2名 コーディネーター：吉田中学校 校長 渡邊 正人 助言者：都留文科大学 教授 廣田 健
	【第二大分科会】 「地域との連携」 ～学校部活動の地域クラブ活動への移行～ ・都留市生涯学習課 スポーツ振興担当 総合コーディネーター 推進官 跡部 洋二 ・総合型地域スポーツクラブ クラブ富士山 アシスタントマネージャー 土屋 ひとみ （富士河口湖町生涯学習課社会体育係） パネリスト：都留第一中学校 教頭 野澤 今日太 コーディネーター：富士河口湖高等学校 校長 加藤 幸一 助言者：健康科学大学 教授 粕山 達也

（文責：事務局）

IV－２．都留市放課後子ども教室事業

１．「都留市放課後子ども教室」事業について

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」（2004年度）および「地域教育力再生プラン」（2005・2006年度）を発展的に引き継ぎ、都留市子ども教育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会生涯学習課が事務局を担って実施している事業である。6つの小学校区（谷村第二、東桂、宝、禾生第一、禾生第二、旭）を中心に、学校の図工室や、各地区のコミュニティセンター等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの活動を行っている。

２．2024 年度の活動状況

地域交流研究センターでは、都留市教育委員会からの依頼を受け、活動指導員として協力してくれる学生を募集している。2015 年度までは、個々の活動ごとに募集をかけて学生が直接申し込む形式だったが、申し込みの多い活動と、少ない活動に分かれてしまい、調整が難しかった。

そこで2016 年度からは、センターが活動指導員として参加を希望する学生をあらかじめ募集して登録を行い、申告してもらった特技や趣味等から、個々の活動の際に教育委員会が適当な学生に直接参加を依頼する、という方法を取るようになった。

2024 年度は 47 名の学生から参加申し込みがあり、放課後子ども教室事業で行われた 95 回の活動のうち 87 回の活動に延べ 505 名の学生が参加し、子どもたちをサポートした。

2024年度放課後子ども教室学生参加状況一覧

■「谷村キャッスルクラブ」（谷村第一小学校）

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	6 月 26 日	七夕飾りで願いごと	家庭科室	3 名
2	6 月 30 日	オリンピックと走ろう！！ 佐野夢加のかけっこ教室	都留文科大学	2 名
3	7 月 11 日	プラバンでストラップ	家庭科室	1 名
4	8 月 16 日	重さのふしぎ～言うことを聞く金魚とスノードームに挑戦しよう～（2～4 年）	都留文科大学	—
5	8 月 21 日	ペットボトルでけん玉①	理科室	2 名
6	9 月 7 日	デザインアプリ Canva でおもしろいものを作ろう！（1～6 年）	都留文科大学	2 名
7	9 月 18 日	ボードゲームを楽しもう	音楽室	1 名
8	10 月 9 日	消しゴムハンコ	理科室	1 名
9	10 月 12 日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう！（1～6 年）	都留文科大学	12 名
10	10 月 12 日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう！（1～6 年）	都留文科大学	10 名
11	11 月 30 日	VR 体験・レーザーカッターでデジタル工作	都留文科大学	6 名

12	11月 30日	VR体験・レーザーカッターでデジタル工作	都留文科大学	6名
合計①				46名

■「三吉子ども体験教室」（谷村第二小学校）

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	6月 19日	自由遊び	グラウンド・体育館	8名
2	6月 30日	オリンピックと走ろう ～佐野夢加のかけっこ教室！～	都留文科大学	2名
3	8月 7日	びしょぬれ大作戦！（午前） 1番濡れるのは誰だ！（学童合同）	グラウンド・体育館	12名
4	8月 7日	びしょぬれ大作戦！（午後） ゲーム・マシュマロ焼き（学童合同）	グラウンド・学童教室	12名
5	8月 16日	重さの不思議～言うことを聞く金魚とスノー ードに挑戦しよう～	都留文科大学	—
6	9月 7日	デザインアプリ Canva を使っておもしろいもの を作ろう！	都留文科大学	2名
7	9月 30日	山歩き🍂秋の七草を見つけよう	谷二小～都留cc～引の田	1名
8	10月 12日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう！（午前）	都留文科大学	12名
9	10月 12日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう！（午後）	都留文科大学	10名
10	10月 18日	自由遊び	体育館	3名
11	11月 30日	VR体験・レーザーカッターでデジタル工作 （午前）	都留文科大学	6名
12	11月 30日	VR体験・レーザーカッターでデジタル工作 （午後）	都留文科大学	6名
合計②				74名

■「菅野川キッズクラブ」（都留文科大学付属小学校）

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	6月 30日	オリンピックと走ろう！！ 佐野夢加のかけっこ教室	都留文科大学	2名
2	8月 16日	重さのふしぎ～言うことを聞く金魚とスノー ードに挑戦しよう～（2～4年）	都留文科大学	—
3	9月 7日	デザインアプリ Canva でおもしろいものを作ろ う！（1～6年）	都留文科大学	2名
4	10月 12日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう！（1～6年）	都留文科大学	12名
5	10月 12日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう！（1～6年）	都留文科大学	10名
6	11月 30日	VR体験・レーザーカッターでデジタル工作	都留文科大学	6名
7	11月 30日	VR体験・レーザーカッターでデジタル工作	都留文科大学	6名
8	12月 4日	クリスマス飾ろう	図工室	1名
合計③				39名

■「桂子ども教室」（東桂小学校）

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	6月 1日	にじいろきょうしつ 【文大生とオリジナルバッグ作り！】	東桂コミセン	7名
2	6月 30日	文大子ども公開講座 佐野夢加のかけっこ教室	都留文科大学	2名
3	7月 14日	にじいろきょうしつ 【文大生のプラバンで風鈴作り！】	東桂コミセン	6名
4	8月 16日	文大子ども公開講座 重さのふしぎ 言うことを聞く金魚とスノードームに挑戦しよう	都留文科大学	—
5	9月 7日	文大子ども公開講座 デザインアプリ Canva でおもしろいものを作ろう！	都留文科大学	2名
6	10月 12日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	12名
7	10月 12日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	10名
8	10月 17日	ゲートボール（学童合同活動）	東桂小グラウンド	1名
9	11月 30日	文大子ども公開講座 VR体験・レーザーカッターでデジタル工作	都留文科大学	6名
10	11月 30日	文大子ども公開講座 VR体験・レーザーカッターでデジタル工作	都留文科大学	6名
11	1月 18日	にじいろきょうしつ 【文大生と文字遊びゲーム！】	東桂コミセン	8名
合計④				60名

■「宝っ子クラブ七里」（宝小学校）

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	6月 30日	文大子ども公開講座 佐野夢加のかけっこ教室	都留文科大学	2名
2	7月 24日	芸術はばくはつだ！ ～版画にちょうせん～①	宝小図工室	1名
3	7月 29日	～小石で描く小宇宙～①（学童合同活動）	多目的ホール	1名
4	7月 31日	～小石で描く小宇宙～②（学童合同活動）	多目的ホール	2名
5	8月 1日	芸術はばくはつだ！ ～版画にちょうせん～②	宝小図工室	1名
6	8月 6日	つるっこ探検隊（学童合同活動） 【びしょぬれ！！水遊び！！】	宝小グラウンド	13名
7	8月 6日	つるっこ探検隊（学童合同活動） 【割りばし鉄砲&わなげ工作】	多目的ホール	13名
8	8月 16日	文大子ども公開講座 重さのふしぎ 言うことを聞く金魚とスノードームに挑戦しよう	都留文科大学	—
9	8月 19日	都留文大こまつり企画 【ミニこまつり】（学童合同活動）	多目的ホール	4名

10	9月 7日	文大子ども公開講座 デザインアプリ Canva でおもしろいものを作ろう！	都留文科大学	2名
11	10月 12日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	12名
12	10月 12日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	10名
13	11月 30日	文大子ども公開講座 VR体験・レーザーカッターでデジタル工作	都留文科大学	6名
14	11月 30日	文大子ども公開講座 VR体験・レーザーカッターでデジタル工作	都留文科大学	6名
15	12月 14日	ボードゲームで遊ぼう（学童合同活動）	多目的ホール	1名
16	1月 10日	都留文大こまつり企画 【ミニうんどうかい！】（学童合同活動）	宝小体育館	8名
合計⑤				82名

■「禾一わくわくクラブ」（禾生第一小学校）

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	6月 16日	ホテル観察会（うら山観察会）	小形山周辺	5名
2	6月 30日	オリンピックと走ろう！ 佐野夢加のかけっこ教室	都留文科大学	2名
3	8月 5日	ひんやりおやつを作って食べよう	禾一小家庭科室	1名
4	8月 5日	ひんやりおやつを作って食べよう	禾一小家庭科室	1名
5	8月 16日	重さのふしぎ～言うことを聞く金魚とスノー ードームに挑戦しよう～	都留文科大学	—
6	9月 7日	デザインアプリ Canva でおもしろいものを作 ろう！	都留文科大学	2名
7	10月 2日	外遊び（学童対象）	禾一小グラウンド	9名
8	10月 12日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう	都留文科大学	12名
9	10月 12日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう	都留文科大学	10名
10	10月 30日	昔のあそび 将棋、けん玉、あやとりに挑戦	禾一小図工室	1名
11	11月 30日	VR体験・レーザーカッターでデジタル工作	都留文科大学	6名
12	11月 30日	VR体験・レーザーカッターでデジタル工作	都留文科大学	6名
13	12月 19日	お友達にクリスマスカードを作ろう	禾一小図工室	1名
14	1月 8日	文大生と遊ぼう 禾一小逃走中！！ （アウトフィッター）（禾一小・旭と合同）	禾一小グラウンド	11名
合計⑥				67名

■「禾二っ子クラブ」（禾生第二小学校）

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	6月 15日	ホタルの観察会	尾県郷土資料館	29名
2	6月 30日	オリンピックと走ろう！ ～佐野夢加のかけっこ教室～	都留文科大学	2名
3	8月 16日	重さの不思議～言うことを聞く金魚とスノー ードームに挑戦しよう～	都留文科大学	—
4	9月 7日	デザインアプリ Canva でおもしろいものを作ろう！	都留文科大学	2名
5	9月 18日	射的大会（学童合同）	禾二っ子ホール	1名
6	10月 12日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう！（午前）	都留文科大学	12名
7	10月 12日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう！（午後）	都留文科大学	10名
8	11月 30日	VR体験・レーザーカッターでデジタル工作	都留文科大学	6名
9	11月 30日	VR体験・レーザーカッターでデジタル工作	都留文科大学	6名
合計⑦				68名

■「旭子ども教室」（旭小学校）

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	6月 5日	盛里コミセン周りを探検してみよう	盛里コミセン周辺	4名
2	6月 30日	オリンピックと走ろう 佐野夢加のかけっこ教室	都留文科大学	2名
3	7月 10日	プラバン工作 お気に入りのキーホルダーを作ってみよう	盛里コミセン別館	4名
4	8月 16日	重さのふしぎ～言うことを聞く金魚とスノー ードームに挑戦しよう～	都留文科大学	—
5	9月 7日	デザインアプリ Canva でおもしろいものを作ろ う！	都留文科大学	2名
6	10月 12日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	12名
7	10月 12日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	10名
8	10月 16日	ラッカセイの収穫	清水さんの畑	4名
9	11月 6日	ボール遊び	盛里コミセン前駐車場	4名
10	11月 13日	軽量ねんどでマグネットを作しましょう	盛里コミセン別館	4名
11	11月 30日	VR体験・レーザーカッターでデジタル工作	都留文科大学	6名
12	11月 30日	VR体験・レーザーカッターでデジタル工作	都留文科大学	6名
13	1月 8日	文大生と遊ぼう 逃走中（禾一小・旭と合同）	禾一グラウンド・体育館	11名
合計⑧				69名

合計（①+②+③+④+⑤+⑥+⑦+⑧）	505名
---------------------	------

（文責：事務局）

IV-3. 文大ボランティアひろば

1. 文大ボランティアひろばとは

文大ボランティアひろば（通称：ボラひろ）とは、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会との話し合いの中から生まれた「ボランティアをとおして交流できる場」のことである。2008年度から1ヵ月に1回のペースで開かれており、本学のボランティアサークルを中心に、地域交流研究センターと社会福祉協議会の職員やボランティアの協力を呼びかけたい地域の方が参加して、緩やかな連絡協議会的な会合の形式で実施していたが、2022年度から新たな形でボランティア事業を再始動した。地域交流研究センターに学生ボランティア登録をしてもらい、事務局からボランティア募集のお知らせや、ボランティア講座、文大ボランティアひろば開催のお知らせを随時メールで周知した。学生は参加したい時に申し込みを行い、社会福祉協議会への登録を許可した学生については、社会福祉協議会のデータベースにも登録した。2024年度の学生ボランティア登録者は100名であった。

「文大ボランティアひろば」については、1ヵ月に1回、12時30分～13時に限定し、地域交流研究センターや社会福祉協議会からのボランティア募集の告知、登録者同士の交流する場として実施した。実施日は下記のとおりである。第3回からは、地域でボランティア活動をしている方にゲストとしてお越しいただき、実際に行っているボランティア活動内容の様子や、ボランティアを始めたきっかけ、ボランティアの魅力、継続の秘訣など直接話を聞くことのできる貴重な時間となった。また、11月には学外へ出て楽山地区の清掃活動を行い実際のボランティア活動を実施した。2024年度については、ボランティア事業の推進を目的として、学生のボランティア活動の活発化を図るため「文大ボランティアひろば」への参加人数の増加に力を入れて取り組んだ。2025年度は更なるボランティア事業の推進について検討していきたい。

第1回	4月25日（木）	1216教室	参加者 47名	ボランティア登録、ニーズ等の紹介
第2回	5月16日（木）	大学周辺	参加者 29名	ゴミ拾いボランティア体験
第3回	6月13日（木）	THMC3階	参加者 25名	ゲスト 浄泉寺 ふらっと食堂
第4回	6月27日（木）	大学周辺	参加者 21名	ゴミ拾いボランティア体験
第5回	7月11日（木）	THMC3階	参加者 19名	ゲスト WakuWakuの家
第6回	7月25日（木）	THMC 玄関前広場	参加者 14名	花壇清掃ボランティア
第7回	10月3日（木）	本部棟・1号館前	参加者 9名	赤い羽根共同募金運動
第8回	10月24日（木）	THMC3階	参加者 14名	ゲスト つるのもり
第9回	11月14日（木）	大学周辺	参加者 11名	ゴミ拾いボランティア体験
第10回	11月28日（木）	THMC3階	参加者 13名	ゲスト 千羽会
第11回	12月12日（木）	THMC 玄関前	参加者 11名	花壇清掃ボランティア
第12回	1月23日（木）	THMC3階	参加者 9名	災害ボランティア体験談

2. 今後の課題

ボランティア登録者に対して「文大ボランティアひろば」への参加がまだ少ない現状である。ボランティア登録者はボランティア活動に関心のある学生のため、そのニーズに答えられる場として「文大ボランティアひろば」を開催していきたい。そのためにも参加人数の安定を図ることが課題となる。

(文責：事務局)

IV－4．学級づくりの向上をめざす実践講座

2024 年度は、5 月から 11 月まで全 6 回の講座を開催した。

- 第 1 回 5 月 25 日（土） 渡辺幸之助（武蔵野大学特任教授）
学級づくりで育む主権者意識～班・リーダー・討議で迫る実践を
- 第 2 回 6 月 22 日（土） 古屋壽人（船津小学校教諭）
発達・環境・個性……子どもの多様なよさを見出せる学級づくり
- 第 3 回 7 月 27 日（土） 梶原斉（小立小学校校長）
学校経営からふり返る学級～経営とは価値をつくり共有すること
- 第 4 回 9 月 28 日（土） 中村香子（元富士学苑中学校教諭）
学級に演劇を～課題克服のねらいをもって脚本を選び創る試み
- 第 5 回 10 月 26 日（土） 三浦慈（大石小学校教諭）
一人一人を見る目の深化～可能性に気づき喜べる学級担任に
- 第 6 回 11 月 30 日（土） 廣嶋敬正（谷村第二小学校教諭）
小 4 の体育科で民主主義を実体験する～みんなが楽しめるルールとは

2024 年度の講座も県内の小中高の教員、本学の学生が、学級づくりの具体的な方法について考え、情報交換をする場となった。各回、講師から示される魅力的な実践記録をもとに参加者同士での活発な議論が交わされ、充実した講座内容となった。

2025 年度は、6 回にわたって開催される予定である。

- 第 1 回 5 月 24 日（土） 渡辺幸之助（武蔵野大学特任教授）
学級づくりの分岐点～組織する力を子どもと共に伸ばすには
- 第 2 回 6 月 28 日（土） 須藤亮佑（大里小学校教諭）
小学校中学年の学級経営に挑む～個から協働への試行錯誤～
- 第 3 回 7 月 26 日（土） 高橋英児（山梨大学教授）
「良い」学級を考える～子どもが安心して楽しく過ごせる学級づくり～
- 第 4 回 9 月 27 日（土） 小佐野真純（河口湖南中学校教諭）
学級が楽しい！～今こそコロナ禍を乗り越えた日々学ぶ
- 第 5 回 10 月 25 日（土） 和智宏樹（上野原小学校教諭）
子どもを信じる学級づくり～ 教師の遊ぶ心×子どもの育つ力～
- 第 6 回 11 月 22 日（土） 渡辺恭子（勝山中学校教諭）
学級づくりでつながる～悩みながらもブレずに挑む教師集団を

（文責：事務局）

IV－5．市民公開講座

地域交流研究センターの部門活動として実施したものは「Ⅱ．各部門の活動」で、また現職教員養成講座と子ども公開講座については「Ⅲ．インターフェイスとメディアの活動」において報告したため、ここではそれ以外のものについて報告する。

1．市民公開講座「英語であそぼう！」

【日程・会場等】

日 時：2024 年 7 月 27 日（土）10:00～11:00

会 場：THMC2 階

参加者：8 名

講 師：上原（かんばる）明子（学校教育学科教授）

【講座の概要】

昨年度に続いて、学校教育学科の上原明子教授と本学学生による市民公開講座「英語であそぼう！」を開催した。4 つの市内小学校の 1 年生から 5 年生を対象に、当日は 8 名が参加し、講師を務める本学学生が担当する 2 つの教室を時間ごとに回り、ゲームやクイズに答えながら楽しく英語を学びました。

2．市民公開講座「佐野夢加 親子かけっこ教室」

【日程・会場等】

日 時：2024 年 7 月 28 日（日）9:30～11:30

会 場：都留文科大学体育館

参加者：17 組 35 名

講 師：佐野夢加（本学特任講師）

【講座の概要】

7 月 28 日（日）、都留市内の小学生を対象とした市民公開講座「佐野夢加かけっこ教室」を開催した。

本講座は、本学特任講師でロンドン五輪陸上競技日本代表の佐野夢加氏を講師に迎えて、2016 年度から毎年開催しているもので、今回は本学陸上部の学生 2 名が補助として参加した。

参加者は小学校 1 年生から 6 年生までの親子 17 組 35 名で、ウォーミングアップのランニングから始まり、ラインの上を走るライン走や、マーカー（小さな平べったいコーン）を利用したマーク走などによって、走るコツを身に付ける練習を行った。

【参加者の感想】

- ・足が速くなってよかった ふだんの遊びの中でもとりいれられそうなテクニックを教えてもらって良かったです！これから家でもやってみます！（2 年生）
- ・遊びながら、走り方が学べてよかった。（1.3 年）
- ・親子で参加してとても楽しかったです。久しぶりに汗をかきました。（保護者）
- ・子どもと一緒に体育館で運動することは、滅多にないことなので、とても貴重な体験ができました。（保護者）

3. 市民公開講座「星空観察会」

【日程・会場等】

日 時：第1回目 2024年11月8日（金）18:20～20:50

第2回目 2024年12月7日（土）18:00～20:30

会 場：自然科学棟 S6 教室、屋上・天文台

参加者：第1回目 12名

第2回目 15名

講 師：古荘 玲子（都留文科大学非常勤講師・国立天文台特別客員研究員）

【講座の概要】

11月8日（金）および12月7日（土）に、本学非常勤講師・国立天文台特別客員研究員の古荘玲子氏と、地域交流研究センター自然共生研究部門の内山美恵子教授による市民公開講座「星空講演会」を開催した。当日は、2日間合わせて27名の参加があり、望遠鏡の歴史や種類、観測予定の天体（木星、土星）に関する講義のほか、展望台及び屋上にて望遠鏡を用いた星空観測を行った。

【参加者の感想】

- ・よく見えてよかったです。ガリレオ衛星、図鑑で見たことあるけれど実際に見ることができて感動でした！！望遠鏡を買いたくなりました。
- ・とっても楽しかったです。講座もスライドが分かりやすくよく理解できました。運営もとてもスムーズですごいなと思いました。望遠鏡で天体を見れるなんて滅多にない機会なので今日の思い出を大切にしたいです。貴重な体験をありがとうございました。また機会があれば、公開講座に参加したいです。
- ・月・土星・木星を2つの望遠鏡を使って観察できて、新たな発見があり、とても面白かったです。2つの望遠鏡でちがった見え方があり、ゆっくりと観察できたため、とても勉強になりました。
- ・とても楽しかった。今までも夜空を見て星の観察をすることはあったが、どれが何という名前の星というのが今回知ることができ、より、星への興味が深まった。土星のリング、木星の模様や、月のクレーターを全て確認することができ、ガリレオ衛星というものも見ることができてとても良かった。学校に通っていても、自然科学棟、またドームに入ることはほぼなかったので大学内にこんなものがあるんだ、と知れて良かった。
- ・日ごろから、自然科学棟にある望遠鏡をのぞいてみたいと思っていましたため、今回参加させていただきました。土星の環や、木星のしま模様等、肉眼では観察できないものをたくさん見ることができ、楽しかったです。
- ・道からドームが見えたので、望遠鏡があるのかなあと思っていました。学生から一般向けの星空観察会があることを聞いて今回初めて参加しました。特別な機会を与えて下さりありがとうございました。古荘先生のお話はわかりやすく、木星のスジや土星の輪が見れて感激しました。ガリレオ衛星のことは初めて知りました。公開講座に今後も参加したいです。
- ・本格的な望遠鏡でみることができてなかなかない機会でありがたかったです。すごく美しくびっくりしました。子どもたちに、グループの参加者も学生さんも優しく接して下さってありがとうございました。

4. 市民公開講座「湧水さんぽ」

【日程・会場等】

日 時：2024 年 11 月 16 日（土）8:40～13:00

場 所：都留市夏狩～十日市場

参加者：6 名

講 師：内山 美恵子（学校教育学科教授）

【講座の概要】

11 月 16 日（土曜日）に地域交流研究センター、自然共生研究部門、内山美恵子教授（学校教育学科）による都留市十日市場・夏狩湧水群を見学する市民公開講座「湧水さんぽ」を開催した。

当日は 6 名の参加があり、太郎次郎滝の溶岩と湧水、十日市場の湧水を見学し、溶岩の話や湧水のしくみなど、楽しく見学し好評のうちに終了した。

【参加者の感想】

- ・ 地元に長く住んでいるので文化財として貴重な資産をきちんと解説していただいで地元再発見として有益な機会となりました。感謝申し上げます。
- ・ 自分の住む地域や生活には欠かせない水について知るきっかけとなりました。普段の生活では気付かず過ごしていたまちの風景が今回の講座を経てより鮮明になりました。ありがとうございました。
- ・ 改めて都留の水について学ぶ、考える機会になりよかったです。気温も低すぎず歩きやすかったです。地形を溶岩から捉えるのは初めてだったのでたくさんのお話を聞くことができました。1 人だと寂しさやただみるだけで終わってしまうので、先生の解説があるとくわしく知ることができました。

（文責：事務局）

V. 地域交流研究教育プロジェクト

V-1. 食育つる推進プラン

【目的】

本プロジェクトは都留市が第6次都留市長期総合計画で策定した「健康増進計画・食育推進計画」（2016～2026年）に位置付けられる重点目標『健康プロジェクト TSURU つる』（旧「食育つる推進プラン」）の各項目1～9に基づくものである。特に、最優先課題とされている「1. 栄養・食育分野」に焦点を当て、大学生が主体となって学内および地域社会における食育の啓発・実践活動を推進することを目的とする。これにより、地域の健康増進および食生活改善に寄与し、学生自身の食育意識向上と地域貢献意識の育成を図る。

【概要】

都留市食育推進計画の分野別目標である（1）食に関する正しい知識の普及と健全な食習慣を实践（2）食の大切さを理解し感謝の気持ちを育成（3）地産地消の推進と食文化の継承を普及、の三項目を柱として、本学学生が市役所や食生活改善推進員など地域関係者の指導・助言を受けながら、食育活動に参画することを計画している。具体的には、食育に関するイベントの企画・運営補助、地元産食材を用いたメニュー開発、健康的な食生活の啓発資料作成などを通して、地域に根ざした実践的な食育推進の仕組みづくりを目指す。また、活動の成果はゼミ活動や卒業論文等を通じて共有し、継続的な学びと地域連携の深化につなげていく。

【2024年度の報告】

「のびのび興譲館クッキング塾」の参加

日 時：2024年12月7日（土）、2025年1月18日（土）

場 所：いきいきプラザ 調理室

対 象：塾生（都留市内小学4～6年生）

参加人数：各回約20名

内 容：

「のびのび興譲館クッキング塾」は、都留市教育委員会が主催する小学生対象の料理教室である。毎月1回、食生活改善推進員や調理師を講師として招き、さまざまな調理体験を通して食の大切さを学ぶことを目的としている。単なる調理技術の習得にとどまらず、地元都留市産の食材を知ること、地域に根ざした食文化や季節の行事食に触れることなど、幅広い食体験を取り入れている点が特徴である。これらの活動を通して、子どもたちが食を人生の基礎として捉え、幼少期から健康で豊かな食生活を実践する力を育むことを目標としている。本学ではこの趣旨に賛同し、年間活動計画のうち第7回および第8回の講座を生活環境科学系ゼミ生が担当した。第7回は「季節の料理（クリスマスメニュー）を作ってみよう」をテーマとし、ビーフシチュー、コーンスープ、ポテトサラダ、マッシュマロフレークバーを調理した。第8回は「郷土料理を作ってみよう」をテーマに、石川県の郷土料理であるぶり大根、いとこ汁、治部煮、みたま、福梅を調理した。小学生にとって、クリスマスメニューは季節感を味わいながら楽しく調理できる題材であり、郷土料理の実習では

大学生との交流を通じて自然に打ち解け、穏やかな雰囲気の中で学びを深める様子が見られた。本活動は、地域の食文化継承および世代間交流の実践の場としても意義深いものであった。

＜2025 年度の予定＞

本プロジェクトは、2025 年度も引き続き継続して実施する予定である。これまでの活動を通して得られた成果と学びを踏まえ、新たに完成したフィールドミュージアム棟を活用しながら、地域とともに展開する食育および交流活動の充実を図る。また、学生が主体となって地域社会と関わる中で、実践的な学びを深めるとともに、その成果を地域へ還元する仕組みづくりを進めていく。さらに、これらの取り組みを通して、地域に開かれた大学としての社会的役割を一層高めることを目指す。

(文責：平和香子)

V-2. こどもフィールド・ノート

【目的】

都留市内の小学校において「つるフィールド・ミュージアム」構想に根ざした学習活動を展開することで、学校に、子どもたちが自由に語り合い、共に聴き合う、安心して自己を表現することのできる〈セーフな探究のコミュニティ〉を拓くことをめざす。

また、子どもたちが都留の自然や生活を表現した作品を集めた地域文集『こどもフィールド・ノート』を作成することで、地域のもつ魅力や価値、あるいは抱えている問題、そして地域の現在・過去・未来について、教室や学校、学年、世代を超えて語り合うことのできる広場（アゴラ）を拓くことをめざす。

【概要】

地域を屋根のない博物館と見立てる「つるフィールド・ミュージアム」構想を手がかりとしながら、都留市内の小学校において、子どもたちが地域の自然や生活を見つめ、記録し、表現する学習活動を展開する。また、地域を舞台とした学習活動を通して生まれた子どもたちの観察記録やレポート、詩、作文、日記、エッセイ、絵画などの作品を、地域文集『こどもフィールド・ノート』としてまとめ、市内の小学校に向けて刊行する。

【2024 年度の報告】

本プロジェクトの協力研究員である北浦の勤務校である宝小学校では、3 年生の総合的な学習の時間において、地域の〈もの・ひと・こと〉と出会う探究的な学習活動を試みた。

1 学期、宝地区のまち探検を行い「あのくらは何のくらののか?」「宝にはどんな花がさいているのだろうか?」「なんで神社に鬼のお面がついているのか?」と、子どもたちは自分の興味のあるものや〈なぞ〉を見つけていった。そして、それぞれの興味や〈なぞ〉をもとに調べ活動を進め、知ったことや分かったことを報告書としてまとめた。調べ活動では、本やインターネットでは分からないことについては、地域の方を教室に招き、インタビューさせていただくことで知ることのできたものもあった。

2 学期から 3 学期にかけては「宝のへんしんプロジェクト」と題して、地域で生産されているものや加工されているものについて調べる学習活動を展開した。ヤギのミルク、ハチミツ、よもぎあんこまんじゅう、銅とテーマごとにプロジェクトを立ち上げ、ヤギの飼育を通してヤギのことを知るなど、体験的・探究的な学習活動を組織した。

その他にも、子どもたちが自然を見つめた詩や俳句といった作品や、暮らしの中で感じた疑問について語り合った哲学対話の記録も含め、学習活動を通して生まれた表現を『こどもフィールド・ノート』の第二号として編纂し、刊行した。今回、俳句は禾生第一小学校の児童のものを掲載することができた。地域を舞台とした探究的な学習活動について、複数校のつながりの中で実践・研究する体制が少しずつつくられてきている。

<2025 年度の予定>

都留市内の教員数名での協力体制のもと、協働的に「つるフィールド・ミュージアム」構想を手がかりとした探究・表現活動が展開できるようプロジェクトを組織化していく。

(文責：北浦貴之)

V-3.「フィールド・キャンパス構想」推進プロジェクト

～学生を主体としたキャンパスの自然保全活動の展開と情報発信に関する研究～

【目的】

本プロジェクトは、自然豊かな本学のキャンパスの生物多様性を明らかにし、それらを学生らの手で保全し、情報発信してゆくことを目的としている。これらの活動により、学生たちが、環境保全の重要性や、人・自然・社会の共生について考え、自らの考えを表現・発信できる技術や態度を育成することを目的とする。

【概要】

本プロジェクトの内容は主に以下の2つのテーマに集約される。

1) キャンパス内の生物多様性を明らかにし、大学内外に発信する。

2) キャンパス内のビオトープを手入れし、観察会や教育活動・探究活動に活かす。

これらのテーマの具体的活動として、①自然観察会など学生と市民との交流事業の企画・運営、②キャンパスの自然紹介など SNS 等を使用した情報の発信、③「キャンパス生きもの Map」に関わる調査・研究、④キャンパス・ビオトープの管理・運営、⑤キャンパス内の植物を活用した食育活動、⑥フィールド・ミュージアムに関する調査・研究、などを、学生、教職員、協力研究員らで協働的にこなっている。

【2024 年度の報告】

2024 年度は、キャンパス内の生物多様性を明らかにするために、ボランティアの学生たちと一緒に、毎月2回ほど、動植物の調査をおこなった。2024 年度は主にキャンパス内の樹木について、樹木の位置と種名を調査した。動物相については、センサーカメラを設置し、それらで撮影された動物の種名の特定や撮影頻度を計測した。これらの調査の結果はデータベース化しているが、その一部を「キャンパス生きもの Map」に掲載することを目標に、Map の編集作業に学生たちも加わった。その成果は、キャンパス生きもの Map2024 年度版として発行された。

キャンパス・ビオトープの管理・運営については、里山の四季折々の在来種（秋の七草などを含む）を、2025 年度4月に供用を開始するフィールド・ミュージアム棟のビオトープに移植するために、育成・保全をおこなった。

また、キャンパス内の植物を活用した食育活動として、初夏と秋に、キャンパス周辺に自生する植物の果実から培養した天然酵母を用いたパン造りをおこなった。

<今年度の予定>

2024 年度に引き続き、2025 年度も同様の活動を継続する。また、2025 年度は、フィールド・ミュージアム棟が完成し供用が開始される。新たにビオトープや自然に親しむ空間造りやその管理に学生たちが関わることにより、本プロジェクトがさらに発展すると期待される。

（文責：別宮有紀子・北垣憲仁）

VI. 協力研究員活動報告

VI-1. 地域交流研究センター協力研究員 伊藤 瑠依

1. はじめに

活動の理念と目的 本年度、私は都留文科大学地域交流研究センター協力研究員として、本学が推進する「フィールド・キャンパス構想」の中核をなす「つるフィールド・ミュージアム」の開設準備および推進活動に従事いたしました。本年度は特に、新棟開設に向けた視覚的基盤の整備と展示空間の構築に重点を置き、以下の五つの軸を中心に活動を展開しました。

2. 年間活動の主要項目と成果

(1) 「つるフィールド・ミュージアム」ロゴマークの策定

プロジェクトの認知度向上とブランド確立のため、ロゴマークのデザインおよびブラッシュアップを実施しました。センター会議での協議を通じ、教員の意見を反映させながらデザインの改良を重ねました。最終的には、カラー規定や組み合わせを明記した「ロゴ使用マニュアル（ガイドライン）」を完成させ、今後の適切な運用基盤を確立しました。

(2) 新棟展示の企画・制作

2025 年度の新棟開設に向け、展示空間の構築に携わりました。忍野村「森の学習館」や山梨県立美術館、世田谷えほん博物館等の視察を通じて展示手法を学び、新棟入口のアイキャッチ用パネルや地域交流研究室の展示パネルのデザインを制作しました。

(3) フィールドワークと写真撮影

アーカイブ構築のため、都留市内および大学裏山の動植物調査と写真撮影を実施しました。季節ごとに変化する景観や生き物を記録し、Adobe Lightroom 等を用いて色味の編集や整理を行いました。これらの写真は、展示パネルや広報誌の重要な視覚素材として活用されています。

(4) 学生に対する展示・編集指導

学生への技術指導に注力しました。都留文科大学前駅の展示改修において、学生とともにパネル作成や標本作成を行い、専門的な編集ソフト（InDesign 等）の操作や標本製作の技術を指導しました。また、学生が主体となって「生きものマップ」や「フィールドミュージアムスタディーズ」の作成に携われるよう、フォーマット作成などの支援を行いました。

(5) 広報媒体の制作と外部発信

活動を多角的に発信するため、多様な広報物のデザイン・編集を一貫して行いました。『フィールド・ミュージアム ニュース』の誌面構成や、「文大名画座」のチラ

シ、学生募集のチラシ作成を手掛けました。さらに、雑誌『散歩の達人』の取材対応など、学外メディアを通じた発信にも貢献しました。

3. 活動を通じて得られた知見と課題

一連の活動を通じ、調査成果をデザインとして視覚化することが、地域住民や学生の関心を喚起する上で極めて有効であることを再確認しました。今後の課題としては、新棟開設後の展示物の持続的な更新体制の確立、および学生がより自律的に広報活動に携われる仕組みの更なる強化です。

4. 総括と次年度への展望

本年度は、ロゴの策定から新棟展示の設計、学生指導、広報基盤の整備まで、フィールド・ミュージアムの骨格を形作る上で重要な成果を収めることができました。次年度の新棟開設を控え、これまでに構築した成果を最大限に活用し、より豊かな学びができる場所を創造していきます。

(文責：伊藤瑠依)

VI－2．地域交流研究センター協力研究員 菊池 香帆

1．活動概要

2024年度は、新棟の活用を見据えた準備期間として、キャンパス内の自然環境を基盤とした活動の基礎づくりに取り組んだ一年であった。鉢植えや土壌の整備、植物の植え替えおよび日常的な手入れを通じて、持続的に管理可能な環境の構築を進めた。

また、フィールド・ミュージアムという場のあり方の考え方を深めつつ、都留市にもともとある自然環境や文化を活かす展示や、アーカイブのあり方について検討を行った。

2．年間活動の実施状況

当初の研究教育活動予定に基づき、キャンパス内の自然環境を活用した調査・保全活動を別宮先生と北垣先生とともに行った。

4月に学生スタッフを募集し、5月に自然調査を開始し、前期は定期調査とビオトープ管理、記録整理を進めた。夏季にはその成果をもとに駅の展示を実施し、後期も継続的な調査と管理を行った。年度末には成果の整理と可視化を行い、「キャンパス内生きものMAP」という成果物の作成につなげた。

これらの活動を通じて、新棟に向けた準備として、植物管理や環境整備を進めるとともに、地域の自然を活かした「野外へ誘う展示」と「ビオトープ」の基盤づくりを行った。

3．主な活動内容

- (1) キャンパス生きもの MAP の調査・研究
- (2) キャンパス・ビオトープの管理・運営および関連活動
- (3) 自然観察・展示・教育活動
- (4) 情報発信準備（SNS 等）

4．成果と課題

本年度の活動を通じて、キャンパスの自然環境を基盤とした調査・保全・教育活動の基礎を整備することができた。特に、継続的な観察および環境管理を通じて、生物多様性を捉えるための記録と実践の蓄積が進んだ。

一方で、活動の継続的な参加体制の構築や、記録・発信のさらなる体系化については今後の課題として挙げられる。

5．今後の展望

今後は、本年度の取り組みを基盤として、新棟における活動の展開を視野に入れながら、キャンパスの自然環境を「フィールド・ミュージアム」として活用していくことを目指す。

その中で、調査・研究・教育・地域連携を有機的に結びつけ、自然と人が関わる場のあり方を継続的に実践・検討していきたい。

(文責：菊池香帆)

付) 2024 年度 (令和 6 年度) 地域交流研究センター担当教員

鈴木 健大	地域社会学科教授	地域交流研究センター長
北垣 憲仁	地域交流研究センター教授	まちづくり研究部門担当
別宮 有紀子	学校教育学科教授	地域交流研究センター副センター長
内山 美恵子	学校教育学科教授	自然共生研究部門担当
福島 万紀	地域社会学科准教授	自然共生研究部門担当
山森 美穂	学校教育学科教授	自然共生研究部門担当
日向 良和	共通教育センター教授	自然共生研究部門担当
吉岡 卓	教職支援センター准教授	共通教育研究部門 (地域情報教育) 担当
野中 潤	国文学科教授	共通教育研究部門 (地域情報教育) 担当
鳥原 正敏	学校教育学科教授	共通教育研究部門 (地域情報教育) 担当
山本 直紀	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門 (地域美術教育) 担当
堤 英俊	学校教育学科教授	共生教育研究部門 (地域美術教育) 担当
佐藤 比呂二	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門 (地域インクルーシブ教育) 担当
山本 剛	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門 (地域インクルーシブ教育) 担当
平 和香子	学校教育学科准教授	共生教育研究部門 (地域インクルーシブ教育) 担当
邊見 信	学校教育学科講師	共生教育研究部門 (社会教育) 担当
富永 貴公	地域社会学科准教授	共生教育研究部門 (社会教育) 担当
吉田 恵理	国文学科准教授	共生教育研究部門 (社会教育) 担当
佐野 夢加	地域交流研究センター特任講師	共生教育研究部門 (社会教育) 担当
山越 英嗣	比較文化学科准教授	まちづくり研究部門担当
畠山 勝太	国際教育学科准教授	グローカル交流研究部門
原 和久	国際教育学科教授	グローカル交流研究部門
事務局：小林美貴子 杉本涼 渡部美由紀		

2024 年度 (令和 6 年度) 地域交流研究センター運営委員会委員

吉岡 卓	広報委員長
堤 英俊	学校教育学科
陳 佑真	国文学科
OLAGBOYEGA, Kolawole Waziri	英文学科
田開 寛太郎	地域社会学科
関 東曄	比較文化学科
畠山 勝太	国際教育学科
小俣 昌寛	経営企画課長
齊藤 浩稔	市民代表 (まちづくり市民活動支援センター長)

2026 年 3 月 31 日 発 行

編 集 者 都留文科大学地域交流研究センター

発 行 者 都留文科大学

〒402-8555 山梨県都留市原田 3 丁目 8 番 1 号

電 話 0554-43-4341 (代)
